

3 調査結果

(1) 伝統芸能

① 踊りの風流

1	チコテン踊り	19
2	洲本民踊 おまあや	19 1
3	由良盆踊り	19
4	炬口大漁踊 <small>たげのくち</small>	19
5	岩屋の盆踊り	19
6	やっちよろまか音頭	19
7	五尺踊	20 2
8	扇おどり	20 3
9	傘おどり	20 4
10	大久保踊	20 5
11	中島踊り 小榎列踊り <small>こえなみ</small>	20
12	阿万地区 各集落盆踊り <small>あま</small>	20
13	阿万 風流大踊小踊	21 6
14	きつねおどり	21
15	机おどり	21
16	机くずし	21
17	沼島の盆踊 <small>ぬしま</small>	21
18	花笠おどり	21

② 練りの風流

19	山田・草香八幡神社 つかいだんじり <small>くさか</small>	22
20	長林寺 つかいだんじり <small>ちやうりんじ</small>	22 7
21	鳥飼八幡神社 舟だんじり <small>とりかい</small>	22 8
22	事代主神社 水かけまつり <small>ことしろぬし</small>	22
23	沼島八幡宮 夏祭	22
24	淡路のだんじり	23 9
25	だんじり唄	23 10

③ 仮装の風流

26	下司 ^{くだし} 大名行列	11	24
27	中田伊勢の森 梯子獅子	12	24
28	浅野の獅子舞		24
29	すわり相撲		24
30	一宮町奉納相撲		24
31	鳥飼八幡神社 大綱引き		24
32	安住寺 ^{あんじゆうじ} の蛇祭		25
33	三原町 子ども相撲	13	25
34	獅子舞		25

④ 人形芝居・地芝居

35	石屋 ^{いいわや} 神社 エビス舞	14	26
36	淡路人形浄瑠璃	15	26

⑤ 民謡

37	洲本小唄		27
38	新洲本小唄		27
39	生田五尺節		27
40	灘の柴刈り唄 (淡路柴刈り唄)		27
41	沼島 だんじり唄正月節		27

(1) — ① 踊りの風流

1. チコテン踊り（盆踊り）

地藏尊の祭礼として奉納された踊りである。三味線の音が、チコテン、チコテンと聞こえるので名付けたといわれており、古くは「しこり踊り」「地藏踊り」とも呼ばれていた。踊りには、「二上がり」「五尺節」「本調子」「地藏踊り」の四種がある。

宝暦年間、阿波藩の家老稲田九郎兵衛が江戸で大病を患ったときに、夢枕で「わたしは淡路の国、桑間村岩鼻の二躰地藏尊である。わたしを祭ってくれるならば、悪病も平癒するであろう。」とお告げがあり、桑間で地藏尊二体が彫り込まれた岩を掘り起こし、一千個のだんごを供えて祈願したところ、家老の病気が治ったという伝説がある。その後、ここにお堂を建て、祭りの日には「千だんご」と呼ばれる小さなだんごが供えられている。

●ところ／洲本市桑間 岩鼻二躰地藏尊

◆時期／8月23日

2. 洲本民踊 おまあや

P5 ①



江戸時代の後半、文化・文政の頃から、洲本の城下で唄われた俗曲に、替唄ができ、踊りがつき、天保から明治時代にかけて洲本の

盆踊りの主流となった。

街角で、おばちゃんが三味線をひき、おっちゃんが太鼓をたたき、姉ちゃんが歌を唄い、皆が輪になって踊ったのが源流だと言われている。現在は、「輪おどり」「町おどり」「舞台おどり」がある。団扇をもって踊る。



※「おまあや」とは、おまえさんという意味
(P52に「おまあや」の歌詞を掲載)

●ところ／洲本市

◆時期／盆 随時

3. 由良盆踊り

「ヤートセ、ヤアトセ」の囃しことばと、太鼓のみで口説かれる。「八百屋お七」「南部坂雪の別れ」等の世話物や、町の身近な話題、さらには、「鈴木主水」のような江州音頭などが口説かれる。編笠にたすき姿の踊り手が、音頭人の口説きと太鼓に合わせ、複雑な足さばきで踊る。数番の由良地音頭が口説かれた後に、江州音頭が入り、これまでの静的な踊りぶりから威勢

のよい「ヨイトヨイアマカ、ドッコイサノセ」の囃しことばに乗って動的な踊りに一変する。

●ところ／洲本市由良

◆時期／盆

4. 炬口大漁踊

今から500年程前（戦国時代）、当時の淡路の国で権威を誇っていた十人衆の一人であった安宅秀興が当地の秋葉山に居城を築いた頃から、城下の住民達の唯一の娯楽として始まったと言われている。盆の15・16日の両日に渋り太鼓、三味線、囃しに合わせて、人情もの、時代もの等たくさんの口説き音頭に乗って盛大に踊り続けられている。

●ところ／洲本市炬口

◆時期／盆

5. 岩屋の盆踊り（薩摩踊）

夏まつりで踊られている。岩屋音頭、仏の供養に踊る在所踊りなどで盛り上がる。

昔は、「御吉例踊」というのがあったと『淡路草』や『淡路国名所図絵』に記されており、老若の踊り子40人ぐらいが白帷子しろかたびらを着て、白手拭いを折りたたんで頭にのせ、2つの太鼓で囃し、提灯の下で踊ったと言われている。「廻り唄」と「本唄」があり、踊り子が廻り唄を歌って踊りの歌出をすると、音頭がこれを受けて本唄になる。漁民が蜂須賀侯に見せて、賞美され、岩屋にあった藩公館に出向いて踊るのが恒例となり「御屋敷踊り」とも称した。岩屋の漁師が薩摩へ出漁したときに、そこで習ってきたので「薩摩踊り」と称したとも言われる。伝承されたのは、「屋敷踊」「恋の踊」「ささら踊」「花踊」「薩摩踊」の5曲で、全曲を通じて中世歌謡の片々が歌詞の一部に混在しているのが注目される。昭和5年に40年ぶりに復活されたが、現在は廃絶しており、復活が期待されるところである。

●ところ／淡路町岩屋

◆時期／8月中旬

6. やっちょろまか音頭

念仏踊りの一種で、先祖の霊の供養に踊る。浄瑠璃文句の音頭で、大太鼓と三味線にのせて、「平（ひらき）」「豆ひろい」「鉄砲」「扇踊り」の4種の踊りを踊る。

●ところ／一宮町郡家

◆時期／盆

7. 五尺踊

P5 ②



淡路島最大の百姓一揆として歴史的に有名な天明2年（1782）の縄騒動に殉じた志士たちの指導者である宮村の才蔵らの命日、3月23日に、「天明志士

の碑」の前で奉納されている。

太鼓、鎌、槍、大刀、番傘、なぎなた、下駄をつかう。

●ところ／緑町 広田八幡宮・大宮寺
天明志士の碑の前広場

◆時期／3月23日

8. 扇おどり

P5 ③

百数十年前から伝えられてきた盆踊りで、当時の若衆組、のちの青年団が中心になって傳承されてきた。扇を持ち、大太鼓を伴奏とする



道具踊りのひとつである。はやし音頭は「ナゴヤ節」と「灘づくし」がある。「浪の花咲く鳴門の海は」から始まる歌詞には、灘をめぐる地名の一つ一つと、その他特有の風情が歌い込められており、昔の人の郷土の自然を愛する心が今に伝わってくる。

現在は、丸山小学校の3年生から6年生の女子児童がこの踊りを傳承している。

扇・太鼓・拍子木をつかう。

●ところ／西淡町 丸山小学校

◆時期／8月15日

9. 傘おどり

P5 ④

阿那賀において、昔から傳承されてきた傘を持って踊る道具踊り。古い形を残しており、大永年間（1521～1527）に、阿那賀城主であった武田山城守の時に始まったと言われている。毎年旧暦の8月15日の夜、その年に亡くなった人の魂を慰める為に、春日寺の境内に灯籠を吊して、月の出より月の入りま



で踊る。踊りが終わると、灯籠をおろし海辺に行き灯籠を流し仏を送る。踊りの伴奏は大太鼓で、音頭とりが踊りの雰囲気

盛り上げる。

傘・太鼓・灯籠をつかう。

●ところ／西淡町 春日寺

◆時期／10月中旬

10. 大久保踊

P5 ⑤

起源は天明年間（江戸時代中期）といわれる。天明の大飢饉の際、百姓宮村の才蔵が代官所へその窮状を訴えて却って反逆の罪を蒙り処



刑された。その霊を慰めるため密かに行われていたものを乙倉山佐尾寺の教雲上人が振付指導し、若者達の間で精霊祭として毎年盂蘭盆に行われてきた。雨乞祭にも行われた。昭和27年無形文化財に選定され、昭和46年兵庫県無形民俗文化財に指定された。

踊の種目は手踊・道具踊等数種あり、衣装や道具を替え歌詞や太鼓の打ち方も変わる。

大太鼓、すげ笠、鎌、槍、太刀、鎖鎌、番傘、なぎなたをつかう。

●ところ／三原町 八木寺の境内 鎮守の森など

◆時期／四季を通して随時 町人形まつりなど

11. 中島踊り 小榎列踊り

いずれも大久保踊の流れを汲むものと思われ、ほぼ同じ。途中途絶えていたが、最近復活した。

●ところ／三原町志知中島・榎列

◆時期／随時

12. 阿万地区 各集落盆踊り

盆踊りは、盆精霊祭の際、祖先に報える供養の一つとして行ってきた。大正末期から昭和の初期にかけて復興の気運高まり、学齢児童の参加を許されるに至り盛んになる。昭和5年頃より農村振興策として盆踊り復興に意を注ぎ盛んになる。盆踊りは、各部落により大同小異あるが大体音頭に合わせ踊るも、音頭は源平兵庫くどき、或いは熊野節等である。中興浄瑠璃音頭というものが専ら流行し、浄瑠璃の文句を三味線に合わせ、時にはその節を崩し謡う。或いは、太鼓・鉦・三味線にて囃す。

近年、地元の町内会、または長老の方たちにより若者たちに傳承しようとする動きが高まっている。

●ところ／南淡町阿万・西町・吹上町・塩屋町・東町・下町

◆時期／8月中旬

13. 阿万 風流大踊小踊

P6 ⑥



旱魃かんぼつに際して神前にこの踊りを踊ることを告げ、雨乞いの願いを込め、その願いがかなえられた後に願解きとして、雨を賜った感謝の意味と、五穀豊穰、郷土

繁栄の祈りをこめて奉納されるようになった。発祥は「大踊」は室町中期から桃山期、「小踊」は江戸中期から後期とされている。昭和42年に兵庫県指定文化財、昭和47年に文化庁選択文化財に指定されている。



鼓、大団扇、チャッキリコ、扇、太鼓、鉦、小太鼓を使う。

●ところ／南淡町 阿万亀岡八幡宮 秋季大祭など

◆時期／9月15日 随時

14. きつねおどり

発祥時期は不明。村の山すそに法輪寺という寺があり、この寺に一匹の古狐が住みつき夜毎出没しては村人を化かしていた。この古狐、化かしかたが滑稽でおもしろおかしく踊りだすという、一風変わったものであった。ある晩、庄屋さんがお寺近くを通りかかると古狐がひょっこり姿を現し、悲しげな顔をして「淡路では狸ばかりがもてはやされて、狐は悪者にされている。狐にもこんな愉快なものがあることを知ってもらいたかった。」と語りかけ、いたずらをあやまり姿を消しました。以来狐のいたずらがなくなり、村人たちはなんだかさみしくなると、酒の席などで狐の仕草で踊るようになったのが始まりといわれる。

太鼓、拍子木をつかう。

●ところ／南淡町北阿万 稲田南神社境内

◆時期／盆 随時

15. 机おどり

「机くずし」の元の踊りと言われており、男は太刀を持ち勇敢に斬り込み、女は机で刃をかわしながら抵抗するさまを表現している。農民がたとえ踊りとはいえ、刀を持って為政者に刃向かうものでありその咎を恐れて「机くずし」は「机おどり」の隠れ蓑としてつくられたのではないかと考えられている。

小机、太刀、太鼓、拍子木をつかう。

●ところ／南淡町

◆時期／盆

16. 机くずし

天明年間（1781～1789）、天災と悪税に苦しむ農民が為政者に対してせめてもの抵抗として踊られるようになった。これは、「机おどり」を崩したもので武器を持たない農民が素手で立ち向かって行くさまを表現した踊りである。

太鼓、拍子木をつかう。

●ところ／南淡町北阿万 稲田南神社境内

◆時期／盆 随時

17. 沼島の盆踊

江戸時代中期に流行した「兵庫くどき」が音頭の源流。歌舞伎、浄瑠璃から取材した文句で白滝流し、俊徳丸、那須の与市等。8月13～17日の5日間各地区ごとに櫓を囲んで輪踊。近年は音頭、踊りともに正調を残さねばとの意見がある。

●ところ／南淡町沼島

◆時期／盆 随時

18. 花笠おどり

北阿万、稲田南地区に伝わる盆踊りで、いつの頃から始まったかは定かではない。現在では所作が判らない状況であるが、惜しむ声もあり掘り起こしを期待したい。

●ところ／南淡町北阿万稲田南

◆時期／盆

(1) — ② 練りの風流

19. 山田^{くまか}・草香八幡神社 つかいだんじり

秋祭りで披露される。このつかいだんじりは、拍子木や太鼓の音に合わせ、約30名の若者がだんじりを軽々と宙に上げたり、横だおしにして回転する伝統妙技。

●ところ／一宮町 山田・草香八幡神社

◆時期／10月

20. 長林寺^{ちやうりんじ} つかいだんじり P6 ⑦



寺伝によれば、往時の淡路領主、細川成春が島内33箇所の霊場を制定し、長林寺が第18番の札所となった時の住職・本高上人が自分の故郷である東北地方の奇祭を導入したのがはじまりで室町時代の文明8年(1475)といわれている。

毎年、長林寺の本尊・十一面観音菩薩の縁日である7月17日の夜に行われる。2人の乗子を乗せただんじりを、担ぎ手が縦、横、逆さ、一回転と操るもので「横がき」「縦がき」「千鳥」「横水車」「しゃちほこ」などの技がある。

国立劇場などへも出演し全国的にも知られている五色町指定文化財の民俗芸能。

●ところ／五色町都志万歳 長林寺の境内など

◆時期／7月



21. 鳥飼^{とりかい}八幡神社 舟だんじり P6 ⑧

鳥飼八幡神社の本殿は慶長8年(1603)に再興されたもので、県指定文化財であり、古建築の少ない淡路島では貴重な建築遺構である。

秋の例祭は、豊漁を願う、舟だんじりの宮入が有名である。

この舟は、江戸時代の木造和船で、1台は安政4年(1857年)の建造で、もう1台はそれより古いと言い伝えられている。

「舟だんじり」は舟体部分(全長6m 幅2.5m)と台車部分(3mと2.5m 長方形の頑丈な木組に直径60cm、厚さ30cmの車輪が4個取り付けられている)の間に直径60cmのワラ束を前部と後部に入れてロープで締めつけば、みよしがぐっとそり上がり舟体は地上から2.5mぐらいで空中に浮いて見える。

庄巻は神門の石段の上がり降り、舟だんじりの一番の見せ場である。3段と13段の石段を降りる時は一瞬舟体が空中に浮いて勢いよく降りて行く。上りは舟は石段を1段1段しか上がらない。やっと上まで上ったと思うと舟のみよしが、神門に当たり神門がゆれる。引く力を少しゆるめると5~6段下がる。ロープを引く者と舟の後を持ち上げる者との呼吸が一致しないと巧く神門をくぐれない。約1時間余り引く者、艇子を入れる者、舟の上で声をかける者、見物客の熱気とが一致し、急調子の掛け声に変り神門の桁に当たっていた舟のみよしが少しずつ下がり桁にすりつけるようにくぐり、一気に本殿前へ横付けされ、舟歌が奉納される。



●ところ／五色町鳥飼中 鳥飼八幡宮

◆時期／10月第3日曜日

22. 事代主^{ことしろぬし}神社 水かけまつり

豊漁祈願の祭りで、漁業の町仮屋ならではの祭りである。御輿は、道ばたから勢いよく浴びせられる水をくぐり抜け、最後に海へそのまま飛び込む勇壮な祭りである。若い衆が担いでおり、喧嘩が絶えず「けんかまつり」とも言われる。

また、御輿にまかされている鉢巻きが、昔から安産のお守りとされており、これを取り合うところから「けんかまつり」の名がついたとも言われる。

●ところ／東浦町仮屋 事代主神社

◆時期／9月第3土曜日

23. 沼島八幡宮 夏祭

曳きだんじり3基、かきだんじり2基が、旧6月15日のものを、昭和40年代に5月3・4日に変更し、放生会^{ほうじょうえ}として始まった。

海の祭で、本祭には弁天様へのお渡りがあり、神輿、だんじり共に海に入る。

●ところ／南淡町沼島

◆時期／5月3日・4日

24. 淡路のだんじり



だんじりは、神社の祭りで曳き回す神座のことで、西日本各地で見られるが、淡路島の特徴は、赤い布団を5枚重ねた「布団だんじり」である。

だんじりの起源は永享8年と古く、台尻と呼ばれた。淡路では、元禄3年洲本八幡神社の祭礼に出された屋台だんじりが始まりで、明治23年頃現在のような布団だんじりが造られ次第に豪華になっていった。だんじり唄も古代は歳時的なものを風刺的に歌っていたが、布団だんじりが造り出されたのを機に浄瑠璃くずしと呼ばれる曲が作り出された。上田八幡に出る投げだんじりは、古来の唄を歌う。

だんじりは、軽装な細工で縦横無尽にひっくり返しながらかつぐ「つかいだんじり」や、鳥飼八幡神社の「舟だんじり」、上田八幡神社の「投げだんじり」など個性的なだんじりなど大変珍しいだんじりがある。

江戸時代の終わりごろに米百石で新調されたことから「百石檀尻」と呼ばれるものもあった。(遠田のだんじり)

- ところ／淡路全域
- ◆時期／年間



P7 9

だんじりは、神社の祭りで曳き回す神座のことで、西日本各地で見られるが、淡路島の特徴は、赤い布団を5枚重ねた「布団だんじり」である。

だんじりの起源は永享8年と古く、台尻と呼ばれた。淡路では、元禄3年洲本八幡神社の祭礼に出された屋台だんじりが始まりで、明治23年頃現在のような布団だんじりが造られ次第に豪華になっていった。

25. だんじり唄

P7 10

祭りの余興に、人形浄瑠璃を基に団体芸として作られたもので、別名「浄瑠璃くずし」とも呼ばれる。物語のハイライトをうまく取り出してメロディーをつけ、アレンジしたものである。だんじりの太鼓と拍子木を使い、全員で唄う「つれ節」に、浄瑠璃調の「語り込み」と民謡調の「振り」という独唱があり、唄の合間に「語り」が入る。



昔は、ハッピー姿で20人前後の若者(祭礼団)が神殿に奉納したが、最近では、老若男女数多くのグループが唄うようになり、コンクールも行われており、淡路の誇る郷土芸能の一つである。

外題には、「傾城阿波鳴門順礼歌の段」「仮名手本忠臣蔵七段目一カ茶屋場の段」「絵本大功記七段目杉の森の段」「玉藻前旭の袂三段目道春館の段」「箱根靈験記十一段目箱根瀧の段」など数多くある。

(P53に「傾城阿波鳴門順礼歌の段」の解説と外題を掲載)

- ところ／淡路全域
- ◆時期／春・夏祭り 随時

26. 下司大名行列



P8 ⑪

「ヨイヤナ」で親しまれているこの行列は、総勢30余名で持ち物・道具・服装など華やかに大名行列そのまま道中を練り、ところどころで「宿入り」の優雅な礼法所作を演ずる。特色としては、道中で唄われるのんびりとした馬子唄は、ほかに類がない独特なリズムであり、また毛槍の所作は浮世絵に登場する「赤坂流」の所作とも言われ大名家の行列の格式がある。起源については江戸文化年間に塩田港が修築されたのを機に藩主の参勤交代の旅情を慰めるために始められたと伝えられている。

挟箱、弓、鉄砲、大鳥毛、毛槍、据槍、台傘、立傘、乗物籠などをつかう。



●ところ／津名町塩田 春日神社

◆時期／春季例大祭に行われていたが最近は不定期

27. 中田伊勢の森 梯子獅子

P8 ⑫



谷から谷を渡って張られた綱と地上10mの梯子の上で演ぜられる獅子舞いの妙技は島内でも珍しい行事の一つである。伝えられるところによれば、徳川八代将軍吉宗が

天下を治めていた享保年間、中田近郷に牛馬の疫病が流行し、その影響で農作物の被害もあり、困り果てた農家では、これを占ってもらったところ、この地に天照皇太神を奉斎すれば治るとのお告げがあったので、早速伊勢の皇太神宮から分霊を授かってきて社を建てお祀りしたのが享保13年5月23日で、その時「伊勢音頭」なども取り入れ、神輿代わりの獅子舞いを奉納したのが始まりだという。江戸末期に神事の余興に梯子の上の所作を取り入れ、工夫した軽業芸が今日まで伝えられている。



天下を治めていた享保年間、中田近郷に牛馬の疫病が流行し、その影響で農作物の被害もあり、困り果てた農家では、これを占ってもらったところ、この地に天照皇太神を奉斎すれば治るとのお告げがあったので、早速伊勢の皇太神宮から分霊を授かってきて社を建てお祀りしたのが享保13年5月23日で、その時「伊勢音頭」なども取り入れ、神輿代わりの獅子舞いを奉納したのが始まりだという。江戸末期に神事の余興に梯子の上の所作を取り入れ、工夫した軽業芸が今日まで伝えられている。

中田地区の9町内会によって、順番に担当していく。町内会によっては、獅子以外に舟をかたどった箱物を使い綱をわたることもある。獅子は、太鼓と囃子で綱を渡る。

●ところ／津名町中田 伊勢神社

◆時期／4月5日～11日の間の日曜

28. 浅野の獅子舞

嘉永3年(1850)、神田原開拓の父といわれる神田五作が、五穀豊穰、村人の家内安全、無病息災を祈念して、播州地方から導入、奉納したのに始まる。現在、浅野の青年たちが後継者としてこの伝統芸能を守っており、富島は八幡神社の祭りに奉納するのをはじめ、町の文化祭などで一般公開している。

●ところ／北淡町浅野地区

◆時期／不定期

29. すわり相撲

石上神社の秋季例祭は、神前、つまり拝殿前でむしろを敷き、すべて男の手で酒・肴を用意して小宴をはる。五穀豊穰を神に感謝する秋季例祭の大事な行事は、「すわり相撲」を行うことである。氏子の2人が東「満作」、西「豊年」に分かれて、むしろの上ですわったままで相撲をとり、交互に6回づつ勝ち抜く神事である。

●ところ／北淡町舟木地区

◆時期／10月

30. 一宮町奉納相撲

現在実施されているのは、蛭子神社(郡家)と日吉神社(新村)、過去には、伊弉諾神宮でも実施されていた。

●ところ／一宮町

◆時期／春・夏祭

31. 鳥飼八幡神社 大綱引き

鳥飼八幡宮の秋季大祭に行なわれるもので、江戸時代の「淡路国名所図絵」にも載る有名な綱引きである。

本祭の前日(宵宮)の早朝より、6地区の氏子たち(各地区10名)が、持ち寄った新米の稲ワラ計2400束(約30aの分)を使って作る。まず、稲ワラ10数把ずつを、ねそで何カ所もしめ、長さ60m 直径40cmの綱を3本作り、補強のため養殖ノリ網をかぶせて巻いていく。この3本の綱を3つ網みにしながら大綱長さ30m、直径80cmを仕上げる。

祭りの最後に行われる祭礼行事で、浜と里に分かれ豊漁、豊作を祈って約200人ずつ引き合う。浜が勝てば豊漁、里が勝てば豊作といわれている。この綱引きは海人が伝えた南方系習俗であるといわれている。

平成3年五色町民俗文化財に指定されている。

●ところ／五色町鳥飼中 鳥飼八幡神社

◆時期／10月第3日曜日

32.安住寺の蛇祭

起源は1470年頃と言われている。農作物を荒らし、住民に退治された大蛇（大蛇退治伝説）の供養祭として行われている。

稲ワラで作った長さ約12m、胴回り約30cmの大蛇が町中を練り歩き、人や車に巻き付く。巻き付かれた人は無病息災のご利益があると伝えられている。

●ところ／緑町 安住寺

◆時期／1月11日

33.三原町 子ども相撲

P8 13



かつては、大人による奉納相撲がどこの神社でも催されていたが、今では府中神社の相撲大会が子供相撲に変更されて28



回を数えた。志知の伊勢明神の相撲大会も今に続いている。

●ところ／三原町 小榎列・志知松本

◆時期／春・夏祭

34.獅子舞

2人が獅子を使い、2人ほどの茂助^{もすけ}がおもしろおかしく獅子を踊らせ、神社の例祭で奉納する。

五穀豊穰の祈禱や悪魔払いとして行われる。

●ところ／淡路全域

◆時期／春・夏祭 随時

祭りの最後に行われる祭礼行事で、浜と里に分かれ豊漁、豊作を祈って約200人ずつ引き合う。浜が勝てば豊漁、里が勝てば豊作といわれている。この綱引きは海人が伝えた南方系習俗であるといわれている。

平成3年五色町民俗文化財に指定されている。

●ところ／五色町鳥飼中 鳥飼八幡神社

◆時期／10月第3日曜日

32.安住寺あんじゅうじの蛇祭

起源は1470年頃と言われている。農作物を荒らし、住民に退治された大蛇（大蛇退治伝説）の供養祭として行われている。

稲ワラで作った長さ約12m、胴回り約30cmの大蛇が町中を練り歩き、人や車に巻き付く。巻き付かれた人は無病息災のご利益があると伝えられている。

●ところ／緑町 安住寺

◆時期／1月11日

33.三原町 子ども相撲

P8 13



かつては、大人による奉納相撲がどこの神社でも催されていたが、今では府中神社の相撲大会が子供相撲に変更されて28



回を数えた。志知の伊勢明神の相撲大会も今に続いている。

●ところ／三原町 小榎列・志知松本

◆時期／春・夏祭

34.獅子舞

2人が獅子を使い、2人ほどのもすけ茂助がおもしろおかしく獅子を踊らせ、神社の例祭で奉納する。

五穀豊穰の祈禱や悪魔払いとして行われる。

●ところ／淡路全域

◆時期／春・夏祭 随時

(1) — ④ 人形芝居・地芝居

35. 石屋神社 エビス舞 P9 14

浜芝居の中にエビス舞があり、その年の豊漁を祈願する。昔は人形を使つての上演であったが、今は人がその代わりをする。鯛を釣り上げる場面では人々が歓喜する。江戸中期から始まったといわれている。太鼓や大盃などの小道具をつかう。



江戸中期から始まったといわれている。太鼓や大盃などの小道具をつかう。

●ところ／淡路町 石屋神社

◆時期／3月第2土曜



36. 淡路人形浄瑠璃 P9 15

淡路島に伝承される人形芝居である。500年前、室町時代末期に、西宮の戎神社に仕えていた百太夫という傀儡師（人形遣い）が、今の三原町市三条に来て人形操りを伝えたのが始まりといわれている。三条八幡神社には、淡路人形発祥の地の碑が建てられている。

元亀元年（1570）、引田源之丞が禁裏御節会に召されて、三社神楽の式を勤めて以来全国に知られた。神事芸能として始まったが、江戸時代、浄瑠璃の台本が盛んに作られ義太夫節と結びつくことにより劇として民



衆が楽しむようになり、阿波藩主蜂須賀氏の保護もあって大いに繁盛し、東北から九州にかけて全国に広く巡業した。最も栄えた江戸中期ごろには、40

以上の人形座とそれに携わる人が900人あまりもいたといわれる。

明治中頃から新しい芸能に人気を奪われて次第に衰え、現在島内に残っている人形座は2座で、三原町淡路人形浄瑠璃資料館が保存展示している市村六之丞座と人形浄瑠璃館（大鳴門橋記念館）で公演している淡路人形座だけになってしまった。財団法人淡路人形協会が保存継承を促がし、淡路人形座員の指導を受けなが

ら、今では後継者団体の活動も活発になってきている。後継者団体には、市小学校、三原中学校や南淡中学校、三原高校などの各郷土芸能部、淡路人形浄瑠璃青年研究会があり、毎年行われる人形まつりの後継者団体発表会で日ごろの成果を披露している。



人形浄瑠璃を大成させ現在の文楽の基を作った植村文楽軒の墓が、東浦町勝福寺境内にある。

●ところ／三原町・南淡町

◆時期／随時

37. 洲本小唄

詩人の川路柳虹氏が、昭和8年淡路島に一ヶ月滞在した際に、白砂青松の大浜海岸、三熊城など風光明媚な洲本の美しさを、町の要人の願いもあって、東京に帰ってから作詞した。そこへ、中山晋平氏の協力を得て、両氏の合作による洲本小唄が誕生し、市丸さんの唄として昭和11年に吹き込みがされ発表された。

しかし、戦争が始まり、レコードの発売が禁止され立ち消え埋もれたままになっていた。大野公民館老人クラブ婦人部が、平成2年に復活させ今も継承されている。

●ところ／洲本市

◆時期／随時

38. 新洲本小唄

昭和24・25年頃、洲本市の観光旅館連盟によって作られたと言われているが、動機等については記録がない。旅館のお膳の箸袋に歌詞が書かれ、だんだんと広められ親しまれる唄となった。

●ところ／洲本市

◆時期／随時

39. 生田五尺節

五尺節の発祥地は、生田田尻または青波黒谷あきなまぐらの小田ともいわれ、労働の中から生まれた唄である。昔、池の大改修工事が行われたとき、粘土や石運び作業中に美声の女性労働者がおり唄を歌い出し、他の労働者もこれに励まされ、作業能率が大いに上がったといわれている。

慶安4年（1651）室津八幡神社新築祝いに祝詞唄として披露され、以後慶事を祝う唄として継承され、結婚式・初老・還暦・上棟などに、長さ五尺の手ぬぐいを持ち、太鼓と三味線の伴奏でにぎやかに踊り唄う。

●ところ／北淡町

◆時期／随時 慶時

40. 灘の柴刈り唄（淡路柴刈り唄）

薪炭が生活必需品であった時代、諭鶴羽山系の山林から雑木を伐採して他所に売却する生業が灘にあった。その時期雇われて薪の運搬に従事する人も多かった。この民謡「芝刈り唄」は、そうした労働の中で生まれ、灘で長く歌いつがれたきた。歌の成立の年代は定かでないが、生活感情や地域性が反映された民謡である。三味線にあわせて唄う。

直原玉青氏が、灘の人々に接し、その生活や風景を描く中で、この唄を聞き、民謡として発掘した。

（P54に「灘の柴刈り唄」の歌詞を掲載）

●ところ／南淡町灘・洲本市

◆時期／随時

41. 沼島 だんじり唄 正月節

宵宮に宮下から各地区へ帰るときにだんじりを時々止めて唄う唄。祝いの席では一番初めに唄う唄。

●ところ／南淡町沼島

◆時期／夏祭・祝宴

(2) 民俗信仰

① 祭事

42	巖島神社 粥占祭 <small>かゆうらざい</small>	30
43	巖島神社 弁天祭り	16 30
44	由良湊神社 五カ所祭り	30
45	由良湊神社 ねり子祭り	17 30
46	夏越し祭り (なごせ)	30
47	開鏡山観音寺 湯立神楽	30
48	お当 <small>とう</small>	31
49	祇園神社 湯立て祭り	18 31
50	的射 <small>まとい</small> の神事	19 31
51	伊弉諾神宮 御粥占祭 <small>いざなぎ</small>	20 31
52	伊弉諾神宮 例祭	21 31
53	広田蛭子神社 茅の輪くぐり <small>えびす かや</small>	32
54	的射の儀	32
55	上八木八幡神社 神踊り	32
56	戎神社 歳の市祭 (エベッサン)	32
57	伊勢明神社 頭神事 <small>い せみょうじんしゃ とう</small>	32
58	久度神社 頭神事 <small>くど</small>	32
59	神代八幡宮 宮座 頭神事 <small>じんだい</small>	32

② 田楽・御田おんた

60	下内膳 お田植祭	33
61	虫送り	33
62	伊弉諾神宮 御田植神事	33
63	ササラ踊り	33
64	豊年枅おどり	33

42. 巖島神社 粥占祭 かゆうらさい

あずきと米を入れて粥を竹筒で炊く。あずきは邪気を払うと言われている。炊きあがった粥の出方で、作柄を予想する。粥占祭のあとに、この粥を食べると無病息災で過ごせるといわれる。

●ところ／洲本市 巖島神社

◆時期／1月15日

43. 巖島神社 弁天祭り

P10 



島内一の弁天祭りとして知られ、昔は旧暦十月の第2亥の日を中心に、3日間行われていたので「亥の子祭り」と言われていた。

祭り最後の「残り福」の日には、白装束の奉仕隊が白布に包まれた御神体を背負い街中を練り歩く。

当日、奉仕隊は、神前でお祓いを受け「チョーサじゃ、チョーサじゃ」の掛け声高く御神体の登場を待つ。御神体を背負った一番担い手が宮司と共に現れ、中央で3度回ったあと、ひとかたまりとなって拝殿下で両手をあげて待ち受ける奉仕隊の中へ飛び込む。昔は、担い手を地面につけずに皆で担いで練ったが、現在では、担い手も途中で適宜交替し、数十人で囲んで練り歩く。この奉仕隊の前後に、子ども御輿や、七福神、鐘や太鼓の囃子などが続く。

この御神幸は、日本の奇祭の一つである。昔は、御神体を巻いている白布（さらし）をわけてもらい安産のお守りとした。

●ところ／洲本市 巖島神社

◆時期／11月下旬



44. 由良湊神社 五力所祭り

漁師の豊漁祈願の祭りで、初めに由良湊神社に参拝し、そのあと由良の1～4丁目の神社5カ所を、御神酒とかけのうお（鯛とヒラメを縄で結わえたもの）のお供えを持ってご祈祷にまわる。生石出石神社、事代主神社、巖島神社、金刀比羅神社、成山神社の順にまわる。波が高く生石出石神社に渡れないときは、船に乗って行く。通称「岬祭り」ともいう。

●ところ／洲本市 由良湊神社

◆時期／3月・10月

45. 由良湊神社 ねり子祭り P10



数え年3歳幼児の氏子入りを祝う祭礼で、神輿の御旅に幼児らが練り従ったことから、あるいは父親らが幼児をかついで走ったこと

から「ねり子祭り」と呼ぶようになったといわれる。淡路の奇祭である。

拝殿で、神官から頭上で鈴を振ってもらう儀式のあと、約700m西にある戎神社を目指して晴れ着を着た幼児を肩に参加者達が走る。戎神社の一番鈴を振ると縁起がよいといわれる。戎神社で金幣で祝福を受け、手にした御幣を奉納して一連の務めが終わる。

明治の頃からグループで走るようになったようだが、最近では親に手を引かれてしすしと戎神社まで歩いている。人生の節目ごとに神の加護を願い、社会的役割を認識する通過儀礼の一種。

●ところ／洲本市 由良湊神社

◆時期／2月11日

46. 夏越し祭り（なごせ）

暑い夏を無事に乗り切り、あわせて豊漁や海上安全を祈るのが夏越し祭りで、勇壮な「水かけまつり」として知られる。神輿を先頭に、だんじり7基が威勢よく練り歩く。この祭りは、数え年41歳の前厄を迎えた氏子のお祓いを主としたもので、前厄にあたる男衆が白装束でみこしをかつぎ、「ワッショイ、ワッショイ」と練り出す。神社から外浜に設けられたお旅所まで約1kmをにぎやかに練り歩くと、沿道の住民らが水をかけて暑気をはらう。そのまま海へ飛び込み、神輿ともども海水で清め、健康と豊漁、海上安全などを祈る。

●ところ／洲本市 由良湊神社

◆時期／7月31日

47. 開鏡山観音寺 湯立神楽

山伏の修験道から生まれたものである。山伏別伝七ヶ条の秘法中の秘法と言われる。400年以上の昔から伝わっていると言われている。五穀豊穰、家内安全、商売繁盛を祈禱する。行者が笹の葉を使って煮えたぎる釜の湯を気合いとともに浴びるというものである。この湯がかかると一年間無病息災で暮らせるという言い伝えがある。

●ところ／淡路町 開鏡山観音寺

◆時期／1月第3日曜

48. お当

仁井の小田地区では、毎年4月3日、お当（頭）と呼ばれる行事が営まれている。社日さんを境内に祭る太田の牛頭天王社で、（通称八坂神社）で行われる。創立の年代は定かでないが、本殿はソギ板葺き流造りで上舎はカワラ葺き切妻造りとなっている。

毎年4月3日は八坂神社の例祭で、お当と呼ばれる行事は、小田の太田、小田本村、霊仙、奥の4部落から神の子、つまり当人と称して未成年の男女5人が、はっぴ姿に盛装して祭典に参列する。神前でお祓いを受け、神主さんから御幣1本を受け取り、これを持って社の周囲を親と一緒に3回まわり、御幣を神前に納めて式を終える。

また、当人5人は前年のこの日、受け当と称して神前で1年間の精進を誓い、将来の加護を祈願する。お当の行事は、子どもの精進と無事成長を祈るのと昔は難産が多かったので子どもの安産を祈り、また、安楽に住める部落になることを願って営まれてきたとも言われている。この行事の起源もはっきり分かっていないが、嘉永3年（1850年）からの天王祭礼当人記帳が残っている。

●ところ／北淡町仁井地区

◆時期／4月3日

49. 祇園神社 湯立て祭り P10 18



京都祇園祭りの7月17日、野島江崎にある祇園さんで例祭が営まれ、珍しい湯立ての行事がある。境内に据えた大きな三つの釜にササ束を持った行者が、煮えたぎる熱湯をそのササで自分の体にふりかけたり、また四方にまき散らす荒行で、この玉湯をかぶると五穀豊穡、家内安全がかなえられると、そのササ束を一本ずつ分け合って持ち帰り、軒下にさしておく風習が残っている。

湯立ては室町時代に盛んとなり、もともと神事として出発したものが神仏習合の時代に修験道者の修法の1つに取り入れられ、そのまま受けつがれてきた。

●ところ／北淡町野島江崎 祇園神社

◆時期／7月17日に近い日曜日

50. 的射の神事 P11 19

野島常盤の福満寺境内右横に「五社大明神」が祀られている。古来、常盤郷の鎮守としてあがめられ、今も正月、秋の祭日には古式にのっとった神事が伝承されている。五社とは、熱田、加茂、春日、貴船、北野の五大神で、本殿は約23㎡の茅葺平屋造り。

正月の頭神事は1月7日で、弓で的を射る「的射の神事」が行われ、1年の月数にちなんで12本の矢を射る。また、10月9日の秋祭りには子どもによる宮相撲が奉納され、同じく12番とられる。



頭神事には、袴で正装した当人2人と射手2人が役をつとめる。的の中央には「鬼」という字が書かれてあり、弓を射ることによって悪魔を鎮圧する。悪魔を退散させ、無病息災、豊年満作などを祈願するのである。



なお、的射の神事は野島平林の貴船神社でも伝承され、京都の貴布禰総本宮貴船神社では的の裏に「鬼」という字が書かれている。

●ところ／北淡町野島常盤 五社大明神

◆時期／1月初旬の日曜日と10月初旬の日曜日

51. 伊弉諾神宮 御粥占祭 P11 20



特殊神事である御粥占祭は、神宮の年間の最重儀として行われている。3本の竹管を入れて粥炊きし、その竹管より出た粥の形状で作物の吉凶を占う。粥炊きの薪には、桃木と松葉を使う。また、竹管は、早稲・中稲・晩稲の3管で、定められた目印の筋彫りを施している。



●ところ／一宮町 伊弉諾神宮

◆時期／1月15日

52. 伊弉諾神宮 例祭 P11 21



淡路の春祭りを代表する祭りで、豪華な檀尻が曳き出され、神幸式が盛大に奉納される。檀尻は10基で、その内8基が布団檀尻（担き檀尻）であり、のこりは、屋台形式の曳き檀尻、特殊な檀尻として知られる「船檀尻（引舟）」である。

例祭当日は、淡路神楽（扇





鈴の舞)が奉奏される。六角の豪華な神輿が神前に据えられ、遷御の儀がある。神幸式の沿道には、神輿への不浄を避けるため、忌竹・注連縄が張られ、「チョーサジャ、チョーサジャ」の掛け声とともに10基の檀尻が神幸する一行の後に続く。

- ところ／一宮町 伊弉諾神宮
- ◆時期／4月21・22日

53. 広田蛭子神社 茅の輪くぐり

蛭子神社は、江戸時代に、恵比寿神が大阪の仏師の夢枕に立ち、我が姿を祭神にせよと告げたという伝説が残っている。7月31日の夏祭りは、「ワゴセ祭り」と呼ばれ、厄払いに「茅の輪くぐり」という行事を行う。伝統的行事として貴重なものである。

- ところ／緑町広田
- ◆時期／7月31日

54. 的射の儀

毎年4月15日春日神社の例大祭に奉納される。6人の射手と2人の矢拾いが選ばれ、最初に大舞（最初に試射する人）が1人で、続いて射手全員で、1回2本ずつ、七・五・三の計15回的を射て、天地四方の悪霊を祓い、五穀豊穰、除災招福を祈願する。この御弓（おんだらし・おゆみ）の神事は江戸時代から受け継がれ、射礼の古式、作法などを忠実に伝えている。

- ところ／西淡町津井 春日神社
- ◆時期／4月第3日曜の前日

55. 上八木八幡神社 神踊り

上八木八幡神社、近世上八木村の庄屋柏木家に、京都より嫁いだ奥方が教えた踊りと伝えられている。

三番叟(15歳)、神踊り(5~6歳)、花踊り(7歳)、鎌倉踊り(9歳)、二見踊り(10歳)、豊年踊り(10歳)があり、伴奏は三味線と拍子木で、それぞれの踊りには唱歌がある。

- ところ／三原町八木
- ◆時期／4月21日

56. 戎神社 歳の市祭 (エベッサン)

600年頃聖徳太子がこの地に物々交換の市場を作ったのが市の始まりといわれる。640年国府が置かれたとき、市場の守護神大市比売大神と福德守護神を祀った。1601年戎神(事代主大神)を祀る。古くから市場として賑わい、12月28日の歳の市は正月用品や神社の福笹を求めて淡路全島から参詣者がある。

- ところ／三原町市
- ◆時期／12月28日

57. 伊勢明神社 頭神事

頭人は、19日に海に行き、海水にて身を清め、海藻と海水を瓶に入れ神前に祀り、それからお御供のもち米を洗う。御供のもちつきは、20日に行く。当日の肴は今でも、黒豆の煮物、大根と目刺し2匹(1人当)となっている。供物は、酒、海、山野のものと御供の餅。頭家は2名ずつ1年交代。

- ところ／三原町志知
- ◆時期／1月21日・5月21日・9月21日・12月21日

58. 久度神社 頭神事

電神を祀る。頭神事は春秋2回。頭人は5人ずつが当番となり、煮しめと神酒で国衙の参拝者をもてなす。

- ところ／三原町神代国衙
- ◆時期／3月16日・9月16日

59. 神代八幡宮 宮座 頭神事

頭人は、三つ頭(氏子入り)、二番頭(30歳頃)、晩頭(36~41歳頃、現在は二番頭直後)と3回頭を受ける。頭を受けるには神事後、餅米2斗で餅400個(昔は360個)とり、今まで頭を受けている参拝者に1個ずつ配る。饗膳には吸い物椀に煮しめ五品を入れる。正月は膳にウラジロを敷く。三つ頭、二番頭を受けておけば、その人は終生1月10日、15日、3月15日、9月15日の祭りには、頭人から餅1個を戴ける。(鑑札必携)晩頭は神酒1升を参拝者に献ず。座は、国衙座(東・中・西)と地頭方座があり、庭上参道より東方は地頭方座、西方は国衙座で、幕張り回しその中に蓆を敷き、正面に座頭市老(頭の世話人)3名が座る。現在では、雨天の日のみ使っていた神社境内にある会館を利用している。

- ところ／三原町 神代八幡宮
- ◆時期／1月10日・1月15日・3月15日・9月15日

(2) — ② 田楽・御田 (おんた)

60. 下内膳 お田植祭

拝殿前の境内において実施され、ブルーシートの上
にワラを敷き詰めて、水田に見立てて行われる模擬田
植式である。

三人一組の早乙女が、黒地に裾模様のある木綿の小
袖を着て、白足袋に赤い草履をはき、紫紺の手甲をし
て、紅色の襟掛けという装束で、両手に苗を見立てた
桜の小枝を1本ずつもち、太鼓に合わせて「桜の花と
富草の花を」の詞章しじょうに合わせて、ワラの上に植え込む
ような所作をする。由来についての伝承はない。

●ところ／洲本市 栢野森住吉神社

◆時 期／4月15日

61. 虫送り

水田で苗についた稲虫を取って麦わらに包み、氏子
全員が神社に集まる。氏子の長老が祝詞を唱え、豊作
を祈願した後、持ち寄った麦わらを境内で焼く。害虫
を焼きながら、「こぬかの虫もさあらえて」と太鼓と鉦
を鳴らして虫送りの歌を唱える。

●ところ／北淡町舟木地区

◆時 期／7月

62. 伊弉諾神宮 御田植神事

戦後の農地解放で田畑を失ったことも相まって、昭
和15年以来中断されていたが平成3年の御大典を機に
再興され、伝統ある御田植唄と御田植踊りが復活。御
斎田整備も進められている。

●ところ／一宮町 伊弉諾神宮

◆時 期／5月下旬

63. ササラ踊り

豊饒を祈願する田楽で、男児14名(うち2名は太鼓
で、あとは踊り子)によって演じられる。

袴かみしもに襷たすきをした子ども達が、前で2人並んで太鼓を打ち、
6人ずつ2列に並び、おのおの左手に長い棒(蛇腹状の
刻みがつけてある)、右手にささら(編木)をもち、次
の歌にあわせて踊る。

「あきのたをかりあけゆけはつゆしけりしたはのお
むつゆにわれぬれるぬれる」(巻物より)

このとき長老は巻物を掲げてもつ。この巻物は、神
歌と踊りの次第と挿絵とを記したもので、年代は文政
12年(1829)。

●ところ／三原町榎列 国府八幡宮

◆時 期／9月4日

64. 豊年枅おどり

明治初期、北海道移住を命じられた南淡町出身の人
たちが故郷を思い出し、厳寒の地で伝統芸能「豊年枅
踊り」を子孫に伝承していた。昭和58年に北海道三石
町と南淡町が友好町の契りを結んだことを機に「豊年
枅踊り」も百年ぶりに里帰りし、地元での再興に立ち
上がり今ではすっかり定着した。毎年、賀集地区の婦
人会の方々により文化祭等で披露され親しまれている。

●ところ／南淡町賀集

◆時 期／随時

(3) 生活文化

① 年中行事

65	きゅうり加持 ^{かじ}	37
66	ケツケまいり	37
67	火踊り	37
68	庚申待ち ^{こうしん}	37
69	おかゆたたき	37
70	ごかき	37
71	地祭り	 37
72	社日ツァン	 38
73	正月迎え	38
74	北淡町の講	38
75	ヤマドツサン	 38
76	柴燈 ^{さいとう}	 39
77	社日祭	39
78	花祭り	39
79	厄払い（三原町の例）	39
80	摩利支天社摩利支天尊のまつり ^{まりしてんしゃまりしてんそん}	39
81	沼島のそうれん	39
82	沼島の年中行事	39
83	モチなし正月	39
84	淡路巡遷弁財天（回り弁天） ^{じゆんせんべんざいてん}	 40
85	淡路巡礼	40
86	淡路の年中行事	40
87	庚申講	40
88	正月の祭祀	40
89	正月の祭祀（正月迎えの行事）	 41

90	団子ころがし	41
91	盆行事	41

② 衣食住その他

92	郷土料理	42
93	郷土料理 のれそれ	42
94	刺し子のどんざ	28 42
95	線香	42
96	淡路の民家	42
97	瓦	42
98	郷土料理 つぼ汁	42
99	郷土料理 法事の料理	43
100	郷土料理 いかなごの釘煮	43
101	郷土料理 いぎす	29 43
102	郷土料理 いびつもち	43
103	郷土料理 かき混ぜ	43
104	郷土料理 鯛めん	43
105	郷土料理 ちょぼ汁	30 43
106	郷土料理 ほおっかぶり	31 43

65. きゅうり加持

きゅうり加持は、弘法大師が四国で広めたものといわれ、淡路では約130年前に四国から来た僧が太照寺へ入山したのを機に始められたといわれている。

きゅうり加持の日には、多くの方が前日から泊まり込み一番加持を競うほどで、早朝から島内各地の参拝者が集まる。皆、「肩こり」「胃腸」といった願い事や名前などを書いた紙をきゅうりに巻いて持参し、これに住職が一本一本祈祷する。一拵いっごと呼ばれる祈祷棒で悪病をきゅうりに封じ込め、お札を授けてくれる。

- ところ／洲本市 太照寺
- ◆時期／7月土用の丑

66. ケツケまいり（毛付けまいり）

田植えが済んだあと、千山へケツケ参りにいき、米の豊作を願って護摩を焚き祈願してもらおう。護摩を焚いてもらったあとの木灰を拾い集めてもらって帰り、田畑にその灰を撒布する。あるいは、祈祷札を飲請してきて、家の門口・軒先や田畑などに立てておく。病害虫の災を除くための呪法である。泥落としとも言う。

※ケツケとは「毛付け」であり、田畑に稲や麦を植え付けることを意味する。

- ところ／洲本市 千光寺
- ◆時期／6月

67. 火踊り

松明を綱の先につけて、火をつけて鉦と太鼓に合わせ回す。一種の送り火の行事である。

この地域には、昔、三昧さんま（埋葬）と参り墓があり、三昧の垣や雑草を焼却する行事であった。

- ところ／洲本市下内膳
- ◆時期／8月16日

68. 庚申待ち

「市原の庚申さん」と呼ばれている。6月5日が「庚申待ち」の日で、6日の本番を前に、住職が「青面金剛法」という一連の儀式を修法する。本番の6日には、「青面金剛法」の儀式が行われ、護摩供養もある。

ここの庚申さん（青面金剛像）は、大阪の四天王寺、宮城県松島にあるものとともに日本三大庚申の一つともいわれ、江戸時代の寛文年間（1661-1716）に四天王寺から飲請された。61日目（6月16日）にめぐってくる庚申の日と、その前日に祭事が行われる。

庚申信仰は、中国の道教に由来するとの説が有力で、

島内でもあちこちに祀られている。

- ところ／洲本市中川原 松栄寺
- ◆時期／6月5・6日

69. おかゆたたき

正月15日の朝、おかゆたたきをして正月送りをする。餅をはさむ木の種類は、地域によって違い、ゴイゴイとかゴタバリとか呼ばれる。「金もってござれ、福もってござれ」といって、神棚、柱、家の入り口などを、木で作った箸でたたく。そのおかゆを食べるとき、松の枝を削った箸を使うところもある。また、おかゆばしらは、苗代に突きさしてその年の豊作を祈るものである。常盤地区では、小ゴオウとミミツキバシを使った後、家の裏の畑にさして、家内安全、豊年満作を祈念する。

- ところ／北淡町
- ◆時期／1月

70. ごかき

宮廷行事につらなるものとして「ごかき」の行事がある。「ごかき」は「おこない」ともいわれ、1月中に行なわれる。現在この行事を厳修している地区としては江崎、平林、大川、大石、常盤、斗の内の各部落がある。「ごかき」は牛王書ごおうがきの転訛したもので、支木に種木を挿入し、それに牛玉宝印の護符を巻き葛でしばりつけた神木を牛王権現の前で祈祷するものであるが、古くから東大寺二月堂、大仏殿、高野山、熊野社、那智権現、祇園社から頒布された牛玉宝印が有名。この神木をもって1月15日の「七種がゆ」の日に「かゆ」をたき、それを神仏に供えて家族全員そのかゆをすすることによって無病息災を願い、子孫繁栄を祈ったのである。この神木は各戸2本以上を用意し、1本は七種がゆに用いるが、1本は春まで床の間で祭り、苗代の播種を終わった時点でそれを苗代に立て、その年の稲の豊作を祈る。

- ところ／北淡町
- ◆時期／1月

71. 地祭り



正月9日に行われる農耕行事である。野島常盤においては12月29日に「コバシサン」を家の前に置いてサイギを供え、大晦日には塩鰯を細く切りきざんで焼いた「ヤキサシ」




や田作りを枡に入れ、米を供えて、「田んぼの田んぼじゅう豊作さして下され」と唱えて線香をたてて祭る。仁井小田地区では、土間の柱に祭っている家がある。地の神に灯明をあげ、その下に蕙をしいて、その上には臼を置き、家の中で地祭りをする。蕙の上でシロモチと強飯をミツワガシ（ホーホーの木）の葉で包み、これを藁でくくって椎の葉に結びつけたものをジノミ（ホーホー）といって家の神々に供えている。正月9日には各自所有の田畑・山地・八幡神社等に供える。

●ところ／北淡町仁井地区・野島地区

◆時期／1月

72. 社日ツァン

P12 

淡路島特有の民間信仰である。社日〔秋分の日（つちのえ）の日に最も近い戌（つちのえ）の日〕に祭る石塔および儀礼のことで、北淡町ではシャニツァンと呼び農耕を営む各部落毎に祭られている。この石塔は、四角形に積み上げた基台の上に安置した五角形の御影石で、多くは南に面した方を正面として「天照皇大神」（あまてらすおおみかみ）、右回りに、「倉稻魂命」（うがのみたまのみこと）「埴安媛命」（はにやすひめのみこと）「少名彦命」（すくなひこのみこと）「大己貴命」（おおなむちのみこと）と五面に神名を陰刻している。



●ところ／北淡町

◆時期／3月

73. 正月迎え

仁井の舟木地区では12月13日をサイギ正月といい、柏の木を切ってきて注連縄を張ってサイギを作る。野島轟木では12月24日がフナゴ迎えで、この日のことをフクニチともいう。朝早く家の煙出しを開けて、藁・松・ばべ（うばめがし）の枝を焼いて大豆を煎る。この皮をむいて豆飯を用意し、漬物のお菜で朝食をすませてから、フナゴを迎えに山へ行く。

この日に正月の米を足踏みで搗いていたので米つき正月ともいう。両地区のように確定的に定めた日はないが、北淡町全域にわたって20日を過ぎるとフナゴ取り、門松迎え、お注連作りが正月迎えの行事として行われていた。

●ところ／北淡町

◆時期／年末

74. 北淡町の講

ある目的をもって一定の人々が集まり、共に飲んだり食べたり、懇親する社会集団のことを講と呼んでいる。経済互助的な講、たとえば頼母子講とか無尽講のような金融を目的とするもの、と宗教的な講の2つに大別できる。

宗教的な講を大別すると（1）原始的な信仰を母体として結成した「山の神講」「庚申講」、（2）氏神を中心にその氏子集団が結成した「大歳講」「明神講」「祇園講」、（3）講中の家を宿として信仰行事を行う「観音講」「地藏講」「念仏講」「えびす講」「荒神講」「弁天講」「阿弥陀講」「大師講」「社日講」がある。

村落外にある寺社へ参拝する代参講には、「伊勢講」「愛宕講」「三上講」「天王講」「えびす講」「金毘羅講」がある。町内では「伊勢講」や「行者講」（三上講）などが多くみられる。山岳信仰に基づく修験道関係のものが多く、いずれも豊作や厄除けを祈願目標としてきた。

●ところ／北淡町

◆時期／三上参りは7月

75. ヤマドッサン

P12 

仁井の舟木地区にのみ古くから伝わっている行事。1月9日の夜、家の裏山から蓑傘姿で訪れてくる。田の神、山の神、そして年の神の性格を持った尉と姥2人のヤマドッサンという神があり、一般には器量の悪い神といわれている。



この姿なき神を迎えるため9日の夜には雨戸を少し開けておき、表の間に上敷をしき、クワ1丁を立ててミノとカサを安置してヤマドッサンの神体を形づくり、その前に2人前のお膳を供える。供物は魚2匹と白餅、餅、大根の輪切り、それにジノミである。



10日の朝にはこの供物をさげて家族でいただくが、ジノミの雑炊は娘に食べさせないという風習がある。娘に食べさせるとヤマドッサンのように器量が悪くなり、縁遠くなるといわれている。

ジノミはミツワガシの葉に飯をのせ、白餅をそえて包み、これをシイの茎でまいてワラでくくったもので、同じ日に田や畑の神である地の神も祀り、豊作を願う。

●ところ／北淡町舟木地区

◆時期／1月9日

76. 柴燈



400年余り前から続いていると伝えられる「柱松の柴燈」は日本に三カ所しか行われていないと言われる奇祭で、送り盆の行事として毎年8月16日の夜に行われる。

8月1日に出役の柴切り役数名が適当な大きさの木柴を切り、薬師堂の庭に運んで半月間乾かす。8月16日、男性は柴燈立ての準備、女性は薬師堂と郷土伝承館内の清掃をする。柴燈は1年間近くの池に浸しておいた丸木柱（昔は竹）を芯に、当日竹切り役が切ってきた割竹で乾燥させておいた柴とわら（昔は麦わら）を巻きつけ、直径約2m、高さ10m余りの柴燈を作り上げる。これを梯子とつかい棒を使い立てる。

夜に、昼間にレンズを使い採火しておいた種火を、地蔵寺の僧侶が読経のあと、火付竿を使って柴燈の頂上に点火する。赤々と燃える炎と共に先祖の霊に祈りを捧げる。

平成3年五色町民俗文化財に指定されている。柴燈のためか栢野地区では100年以上民家の火災が無いといわれている。

●ところ／五色町鮎原
栢野薬師堂の前庭（郷土伝承館前）

◆時期／8月16日

77. 社日祭

春分・秋分の日にもっと近い戌の日に行く。五角形の石に天照大神、稲倉魂命、植安姫命、少彦名命、大己名命の五神を刻み祀る。これに5本の笹竹に注連縄を張り、魚、果物、野菜、神酒、鏡餅を供え、頭座を設ける。

頭人は五人当て順番制で、参拝者に、神酒と五品の菜でもてなす。

●ところ／三原町

◆時期／春秋2回

78. 花祭り

国宝、国重要文化財である釈迦如来像を本尊に祀る淡路国分寺の花祭りは、昔は陰暦4月8日であったが、戦後は毎年5月8日に行われている。つつじの花で飾ったなかに小さな釈尊の像を置き、参詣者が甘茶をかけてお祈りやお祝いをする。昔は甘茶のたまった器から甘茶をいただいて帰ったが、現在では衛生上から別に容器に入れた甘茶を販売している。

●ところ／三原町八木 国分寺・淡路全域

◆時期／5月8日

P13 25

79. 厄払い（三原町の例）

男子数え年42歳の厄年に行く。前厄、本厄、後厄と3回厄除け祈願をする。正月に日和佐あるいは筒井の薬王寺に参る。本厄の年は氏神にも厄除け祈願をし、夜、引き潮の時間を選んで棚流しをする。棚に神酒、魚、餅を3組乗せ、餅を42個持参し、海岸への途中曲がり角ごとに持っている餅を落としていく。立春までに、親戚、隣保、付き合い、友人・知人等を招いて大宴会をした。昔は、3日3晩したが、近年は1日ですませるようになり、最近では、厄除け祈願だけして、宴会をする人は少なくなった。

●ところ／三原町

◆時期／年間

80. 摩利支天社摩利支天尊のまつり

栗原城主島田遠江守が守り本尊として祭祀した。1月18日の祭日には露天にたくさんの店が並び、近郷近在の人々の参詣で賑わう。

●ところ／三原町神代浦壁

◆時期／1月18日

81. 沼島のそうれん

葬式は昔から変わらぬ野辺送り形式。親戚、知人が集まり相互扶助の精神で手伝う。杖持ち、火手、生花、線香、茶湯台、鶴亀、紙花等の役が色々ある。

※そうれんは「葬列」が転じた言葉。

●ところ／南淡町沼島

◆時期／年間

82. 沼島の年中行事

旧3月3日 桃の節句

桃の一枝を神仏、墓の供花に添える。

旧5月5日 端午の節句

ヨモギ、カヤ、ユリ、とらの尾、しょうぶの5種類を供花に添える。

旧9月9日 栗節句

栗を供え、小菊を神仏、墓の供花に添える。

旧4月8日 花まつり

つつじの花を添える。天花、七寺参り。

●ところ／南淡町沼島

◆時期／年間

83. モチなし正月

正月を中心としたある期間にモチをつかず、食べず、供えずという禁忌を、一つまたそれ以上継承している家、一族、地域の正月のことをいう。歳桶にも神仏に

もモチは供えないし、鏡モチもない。

●ところ／南淡町阿万佐野町

◆時期／1月

84. 淡路巡遷弁財天 (回り弁天)

P13 



いつからかは定かではないが、天正15年(1587)からとも伝えられている。明治12年以降、高野山から新たに弁財天の画軸を受けて「淡路巡遷弁財天」として行われるようになった。

昔、佐野に住んでいた城喜代という目の不自由な男性が、兄である高僧を訪ねて高野山に参り、弁財天の尊像を授けられ、日夜篤く信仰すると目が見えるようになった。これを聞き伝えて信仰するものが増え、弁財天が巡遷奉迎されるようになった。



このように、弁財天は淡路島の中でつぎつぎと回りながら祭られていくので「回り弁天」と言われる。

●ところ／淡路全域

◆時期／年間

85. 淡路巡礼 (淡路西国三十三カ所霊場めぐり)

淡路巡礼で最も古い歴史をもち、島民に親しまれてきた。人間のあらゆる災難にあたって、33の身に姿を変えて救済を施すという観音菩薩の誓願から、33カ所の観音霊場を巡る。淡路では、室町末期の文明7年(1475)淡路守護職細川成春によって始められたとも、永正10年(1513)阿万上本庄の城主の内室が、和歌の師範である秀善尼と一緒に巡礼したのに始まるともいわれる。

淡路四十九薬師霊場めぐり

薬師如来は、死を招く病気から守ってくれるので、庶民は村に薬師堂を造り、無事息災を祈った。淡路島内49の薬師霊場を巡る巡礼は、「淡路西国三十三カ所霊場」が成立した直後に生まれ、古い歴史をもっている。

淡路四国八十八カ所霊場めぐり

西国や淡路の霊場を巡るのを、西国巡礼・淡路巡礼などという。四国の場合は「四国遍路」といい、信仰の厳しさがあり、衣装も死装束である白衣をまとう。「淡路四国八十八カ所」は、天明4年(1784)に、三原郡伊賀野村の金次郎によって始められた。現在のものは、昭和

6年千光寺住職の和田性海と栄福寺住職岡崎密乗が中心となり全島真言宗の賛同をえて制定された。淡路巡礼は四国遍路と比べて、明るさと華やかさが特色である。

●ところ／淡路全域

◆時期／年間

86. 淡路の年中行事

2月3日 節分(豆まき)

立春の前日、大豆を炒って一升枧に入れ神に供える。夕方「鬼は外、福は内」と言いながら豆をまいて鬼を追い、家族揃って歳の数だけ豆を頂く。オシメに節分札をはさみ年末まで玄関に張っておく。このときのオシメのシメノコは七五三にする。

3月3日 雛祭り

雛人形を飾り、草餅や色餅を菱形に切り神仏に供え、桃の花を白酒に漬ける。

5月5日 端午の節句

4日の晩、茅、蓬、菖蒲を束ね屋根に上げる。菖蒲湯に入ったり、菖蒲で鉢巻をしたり(男)、髪に挿したり(女)、布団の下に敷いて寝たりする。

7月7日 七夕

7日早朝、里芋の葉にたまった露を集めて墨をすり、短冊に願い事などを書いて笹に吊るし、軒下に立てる。昔は、瓜、茄子、西瓜等を供え、夜空の天の川を拝み、翌朝供え物や笹を川に流した。

●ところ／淡路全域

◆時期／年間

87. 庚申請

青面金剛を祀り、神道では猿田彦を祀る。庚申の夜は徹夜で拝むため、庚申の夜に作った子は盗人になるという。講中ごとに60日目の毎庚申の日に当番の家に掛け軸を回し白餅と神酒を供え、そこに集まって真言を唱えて拝み、後で茶菓子を出す。

●ところ／淡路全域

◆時期／庚申日

88. 正月の祭祀

ワカミズムカエ・サンガ

大晦日の夕から正月三が日、盛り土に線香を立て、門松には白飯、大根なます(串柿の千切りを混ぜる)、田作り等を供える。元日の朝、主人が注連飾りを張った桶やバケツに若水を汲む。その水で雑煮を炊く。一年の無事息災を祈り、お屠蘇で祝い、雑煮を食べる。その年の恵方の神社や寺に参る。

シメオロシ

四日、注連飾りをおろす。

ナナクサタキ（七草粥）

七日早朝七草を摘み、まな板に載せて「唐土の鳥が日本の国へ渡らぬ先に七草ナズナ」と言ってトントコトン、トコトントントンと庖丁、すりこぎでたたき、それを入れておかゆを炊き神仏に供え、家族で食べる。

ジマツリ

九日の朝、宅地または近くの田に土を盛り、これに耕作田の数だけシキミ（地シバ）の束に米の粉を練りふり掛ける。夕方に、わらを敷きホナガ（ウラジロ）を並べ、柏の葉に白餅、ナマコナマス等を供え、ミチグラ2本宛と線香を立て、家主が「〇〇の神さんよ、オオイー、オオイー」と田の神を呼び、今年の豊作祈願をする。ミチグラは女竹を一節毎に切り端に半紙片を挟み幣にしたもの。

カユタタキ

十五日の朝、オカユタタキをして神々を送り出す。オトッサンの小餅を入れた小豆粥を炊き、神々に供えるときに器物のふちをたたいて「明年ござれ、またござれ、福もってござれ、金もってござれ」と言って送る。この日のお粥は長いミチグラ（竹の箸）でいただく。門松などのお正月さんはカユタタキの前にとり、サイキ（門松の杭）は後でとる。

●ところ／淡路全域

◆時期／1月

89.正月の祭祀（正月迎いの行事）

ススハライ

箆や箒で天井裏から煤やくもの巣を落とし、畳をあげて屋外で干し、たたいてごみを落とし、屋内を拭き清めた。生活様式の変化から最近ではあまり行われなくなった。

松迎え

12月末深山から正月（歳神）を迎える。松、榊、カスクライ、ウラジロ、山土等を取ってくる。

もちつき

昭和30年代頃までは杵でつく家が多かったが、しだいに機械つきが増えていった。神様の供え物として鏡餅やチョコツキの餅、貯蔵食の小餅などを作った。寒に入ると寒餅をつき、あられやおかきを作った。

屋飾り

大晦日に屋敷内を清浄にして門口に門松を立て盛り土をし、注連縄を張る。家で祀る神々や日ごろ使う出

入り口、井戸、便所にいたるまで小さな門松を立て、注連縄を張る。門松は、松、榊、カスクライを束ね、右に雄松、左に雌松を飾る。注連縄は、シメノコを一・五・三と垂らす。所により、井戸には二・五・三、便所には四・五・三のものを張る。床の間には、三宝にウラジロを敷き、鏡餅、串柿、橙等を祀る。

オトッサン

屋内に棚を新年の恵方に向けて吊り歳徳神を祀る。棚には、門松、注連縄、歳桶を祀る。歳桶にはウラジロを敷き、チョコツキの餅を月の数に合わせて12個入れる。

●ところ／淡路全域

◆時期／12月下旬



P14 27

90. 団子ころがし

死者の五七日忌に、親類縁者知友が高い山へ登り、持参の団子（または握り飯）を谷間に向かって転がし落とすという行事。

顔を進行方向に向けたまま後ろを振り向かずに、団子を谷底の方へ放り投げる。冥道には多くの鬼が出現して死者の行旅を邪魔する。その時に団子を転がすと、それに気をとられて油断するので、そのすきに死者が前進するというものである。仏の死出の山路を助けるという供養行事である。

●ところ／先山・地藏山・開鏡山・愛宕山・妙見山など

◆時期／年間

91. 盆行事

8月13日の昼ごろおちつき団子を供え、14日早朝（所によって13日）きりませ（茄子、ササゲ、胡瓜を細かく切り米と混ぜ合わせたもの）を墓に供え、提灯に火をともして仏を迎えてくる（墓で迎え火を焚く所もある）。15日夕方提灯で仏を墓まで送る（墓で送り火を焚く所も）。縁側の外に餓鬼棚を設け、里芋の葉に茄子、胡瓜、白瓜、ささげなどを供える。胡瓜や茄子に割り箸で足をつけ馬や牛に見立てる。

●ところ／淡路全域

◆時期／8月13～15日

92. 郷土料理

魚身を包丁で叩いてそぼろにし、醤油と砂糖で甘辛く煮る。すし飯を木枠に入れ、上にそぼろ煮をのせて押し寿司にする。四季折々の魚で楽しむことができ、漁師町ならではの料理である。

●ところ／淡路町

◆時期／年間

93. 郷土料理 のれそれ

春先から初夏にかけて、あなごの稚魚をしゃぶしゃぶにしてポン酢につけて食べる。あなごの稚魚が透明で、子どもの鼻がたれている様子に似ているところから「はなたれ」とも言われる。

●ところ／淡路町

◆時期／春

94. 刺し子のどんざ

P14 



寒さと湿気から身を護るために木綿布に刺し縫いして作ったもの。どんざという用語は、江戸時代以降に使われてきた。当時どんざは、「どてら」「どんざぬのこ」などと呼ばれた。淡路島のどんざは、仕事着というよりも、陸

での漁業以外の活動、たとえば都市での魚の行商とか、特別の祝い事にいくときなどのおしゃれのために着用された。一着作るのに、半年はかかったと言われる。どんざは、平織りの木綿布を三枚重ねて作られている。



●ところ／北淡町

◆時期／冬

95. 線香

江戸時代に堺から持ち込まれた線香産業は、漁師たちの冬季産業であった。現在は、生産高日本一を誇る。線香工場が集まる江井の町は、日本全国香り100選に選ばれており、今や線香は町の文化になっている。

また、一宮町枯木神社には香木伝来の伝説があり、香道の始まりともいわれている。

●ところ／一宮町

◆時期／年間

96. 淡路の民家（正井家）

古民家の少ない淡路島において、庄屋の建築形式の変遷を知る上で極めて重要な建築物である。川で区画された敷地に天保頃の景観を示す庄屋の偉容を誇る屋敷構えの事例である。入り口近くに厩をおき、土塀の外を田畑にしている。母屋は平屋建て平入、屋根は寄棟造りで、大戸口を正面にし、式台は二間と大きく格式を表している。式台の欄間には家紋も入れている。オモテの北には東寄りにホトケサン（仏壇）、西寄りにカミサン（神棚）を置いている。

床のあるカミオモテは八畳である。カミオモテの南にはオモテロウカ（表廊下）があり、西側に茶室とカミベンジョ（上便所）とキャクブロ（客風呂）があり、手水鉢を置く坪庭を設けている。

淡路島の民家は、北淡路と南淡路では家の建て方が土地柄により違う。南淡路では母屋の前にナガヤ（収納室・畜舎・穀物倉）が南に向かって建てられ、母屋の裏にはヒヤまたはハナレがあり、北淡路では、母屋の裏にナガヤを設け、東側・西側にヒヤを設けるのが多い。これは、土地が狭い関係による。

(P55に平面図を掲載)

●ところ／東浦町

◆時期／年間

97. 瓦

日本における瓦づくりの歴史は飛鳥時代に遡るが、そのころには淡路島でも瓦づくりが始められていた。淡路で製造される瓦は「淡路瓦」と言われ、いぶし銀色のいぶし瓦が昔から生産されてきた。いぶし瓦生産は現在日本一である。

「御原橋」「ふれあい瓦舞台」「プロポーズ街道」「緑の道しるべ薨公園」などのさまざまなモニュメントや干支瓦などがあり、淡路島のひとつの文化となっている。

●ところ／西淡町・南淡町

◆時期／年間

98. 郷土料理 つぼ汁

法事につくる汁物。きくらげ、小芋、かんぴょうを煮て味噌で味付けする。地域によっては、かんぴょうを結んだり、砂糖を隠し味に入れるところもある。

●ところ／南淡町

◆時期／年間

99 郷土料理 法事の料理

法事の時には、豆腐を細の目に切り、白味噌の甘い味噌汁を作る。上に青のりを少しふりかける。

●ところ／南淡町沼島

◆時期／法事

100. 郷土料理 いかなごの釘煮

新子を醤油と水飴や砂糖で煮込み、隠し味に土しょうがを入れて作る。釘のように曲がって固まるので釘煮と呼ばれる。

●ところ／淡路全域

◆時期／春

101. 郷土料理 いぎす

P14 29

海草の一種で、乾燥いぎすをぬか汁で煮溶かし、冷やして固め、拍子木状に切り、からし酢みそをつけて食べる。盆の料理。



●ところ／淡路全域

◆時期／盆

102. 郷土料理 いびつもち

いびつ（さるとりいばら）の葉に包むおもち。端午の節句などに作られる。

●ところ／淡路全域

◆時期／春

103. 郷土料理 かき混ぜ

野菜や魚を混ぜ込んだすしのことで、淡路風五目すし。桃の節句や祭りなどの行事のときに作られる料理。

●ところ／淡路全域

◆時期／年間

104. 郷土料理 鯛めん

祭りや祝い事に出される豪快な郷土料理。南淡路名産のそうめんと、鳴門海峡の鯛を大皿に盛りつけた料理。尾頭つきの鯛を、一度揚げて、煮込み、鯛のまわりにそうめんを波のように盛りつける。

●ところ／淡路全域

◆時期／年間

105. 郷土料理 ちょぼ汁

P14 30

出産後の祝いとして作る汁物。ササゲ、ズイキ（里芋の茎）、米だんごを煮て味噌で味をつける。赤ちゃんが生まれると、ちょぼ汁をお七夜が明けるまで毎日産婦に食べさせる。ササゲ、ズイキは古い血を下して新しい血を増やし、団子は体力をつけ乳を増やすといわれる。かわいい子供になるように団子を小さく心を込めて作る。男の子の時は団子の先をちょっと尖らせ、女の子の時は俵型にするところもある。出産の忌明けに宮参りをし「ひあわせ」といって親戚、縁者を招いてちょぼ汁を食べてもらう。



●ところ／淡路全域

◆時期／年間

106. 郷土料理 ほおっかぶり

P14 31

俵型に握ったすし飯の上に、手開きして酢じめした鯛（または鰹）を、ほおかぶりさせるようにはりつけるので、「ほおっかぶり」といわれる。



●ところ／淡路全域

◆時期／年間

4 參考資料

4 - (1) 歳事記

① 概ね年1回定期的に行われるもの

月	名 称	番号	と ころ	備 考	
1月	おかゆたたき	69	北淡町		
	地祭り	71	北淡町仁井地区・野島地区		
	モチなし正月	83	南淡町阿万佐野町		
	正月の祭祀	88	淡路全域		
	ヤマドッサン	75	北淡町舟木地区	9日	
	安住寺の蛇祭	32	緑町	11日	
	巖島神社 粥占祭	42	洲本市 巖島神社	15日	
	伊弉諾神宮 御粥占祭	51	一宮町 伊弉諾神宮	15日	
	摩利支天社摩利支天尊のまつり	80	三原町神代浦壁 摩利支天社摩利支天尊	18日	
	ごかき	70	北淡町		
	開鏡山観音寺 湯立神楽	47	淡路町 開鏡山観音寺	第3日曜日	
2月	由良湊神社 ねりご祭り	45	洲本市 由良湊神社	11日	
3月	社日ツァン	72	北淡町		
	石屋神社 エビス舞	35	淡路町 石屋神社	第2土曜日	
	五尺踊	7	緑町 広田八幡宮・大宮寺天明志士の碑の前広場	23日	
4月	お当	48	北淡町仁井地区	3日	
	中田伊勢の森 梯子獅子	27	津名町中田 伊勢神社	5日から11日の間の日曜日	
	下内膳 お田植祭	60	洲本市 栢野森住吉神社	15日	
	上八木八幡神社 神踊り	55	三原町八木	21日	
	伊弉諾神宮 例祭	52	一宮町 伊弉諾神宮	21・22日	
	的射の儀	54	西淡町津井 春日神社	第3日曜日の前日	
5月	沼島八幡宮 夏祭	23	南淡町沼島	3日～4日	
	花祭り	78	三原町八木 国分寺・淡路全域	8日	
	伊弉諾神宮 御田植神事	62	一宮町 伊弉諾神宮	下旬	
6月	ケツケまいり	66	洲本市 千光寺		
	庚申待ち	68	洲本市中川原 松栄寺	5・6日	
7月	長林寺 つかいだんじり	20	五色町都志万歳 長林寺の境内		
	虫送り	61	北淡町舟木地区		
	祇園神社 湯立て祭り	49	北淡町野島江崎 祇園神社	17日に近い日曜日	
	きゅうり加持	65	洲本市 大照寺	土用の丑	
	広田蛭子神社 茅の輪くぐり	53	緑町広田	31日	
	夏越し祭り(なごせ)	46	洲本市 由良湊神社	31日	
8月	扇おどり	8	西淡町 丸山小学校	15日	
	火踊り	67	洲本市下内膳	16日	
	柴 燈	76	五色町鮎原 栢野薬師堂の前庭(郷土伝承館前)	16日	
	チョコテン踊り	1	洲本市桑間 岩鼻二躰地藏尊	23日	
	盆行事	91	淡路全域	13～15日	
	阿万地区各集落盆踊り	12	南淡町西町・吹上町・塩屋町・東町・下町	中旬	
	岩屋の盆踊り	5	淡路町岩屋	中旬	
	沼島の盆踊	17	南淡町沼島	13～17日	
	机おどり	15	南淡町	盆	
	花笠おどり	18	南淡町北阿万 稲田南	盆	
	やっちょろまか音頭	6	一宮町郡家	盆	
	炬口大漁踊	4	洲本市炬口	盆	
	由良盆踊り	3	洲本市由良	盆	
	きつねおどり	14	南淡町北阿万 稲田南神社境内	盆 随時	
	机くずし	16	南淡町北阿万 稲田南神社境内	盆 随時	
	洲本民踊 おまあや	2	洲本市	盆 随時	
	9月	ササラ踊り	63	三原町榎列 国府八幡宮	4日
		阿万 風流大踊小踊	13	南淡町阿万 亀岡八幡宮秋季大祭など	15日 随時
		事代主神社 水かけまつり	22	東浦町仮屋	第3土曜日

月	名 称	番号	と ころ	備 考
10月	すわり相撲	29	北淡町舟木地区	
	山田・草香八幡神社 つかいだんじり	19	一宮町 山田・草香八幡神社	
	鳥飼八幡神社 大綱引き	31	五色町鳥飼中 鳥飼八幡神社	第3日曜日
	鳥飼八幡神社 舟だんじり	21	五色町鳥飼中 鳥飼八幡神社	第3日曜日
	傘おどり	9	西淡町 春日寺	中旬
11月	巖島神社 弁天祭り	43	洲本市 巖島神社	下旬
12月	戎神社 歳の市祭(エベッサン)	56	三原町市 戎神社	28日
	正月の祭祀(正月迎えの行事)	89	淡路全域	下旬
	正月迎え	73	北淡町	年末

② 年に2回以上定期的に行われるもの

名 称	番号	と ころ	備 考
的射の神事	50	北淡町野島常盤 五社大明神	1月・10月初旬の日曜日
由良湊神社 五カ所祭り	44	由良湊神社	3月・10月
伊勢明神社 頭神事	57	三原町志知	1月21日・5月21日・9月21日・12月21日
久度神社 頭神事	58	三原町神代国衙	3月16日・9月16日
神代八幡宮 宮座 頭神事	59	三原町 神代八幡宮	1月10日・1月15日・3月15日・9月15日

③ 概ね祭にあわせて行われるもの

名 称	番号	と ころ	備 考
庚申講	87	淡路全域	庚申日
獅子舞	34	淡路全域	春・夏祭(随時)
だんじり唄	25	淡路全域	春・夏祭り(随時)
下司大名行列	26	津名町塩田 春日神社	春季例大祭に行われていたが最近是不定期
一宮町 奉納相撲	30	一宮町	春・夏祭
社日祭	77	三原町	春秋2回
三原町 子ども相撲	33	三原町小榎列・志知松本	春・夏祭
沼島 だんじり唄 正月節	41	南淡町沼島	夏祭・祝宴

④ 随時あるいは年間を通じて行われるもの等

名 称	番号	と ころ	備 考
淡路巡遷弁財天(回り弁天)	84	淡路全域	年間
淡路巡礼	85	淡路全域	年間
淡路のだんじり	24	淡路全域	年間
淡路の年中行事	86	淡路全域	年間
団子ころがし	90	先山・地藏山・開鏡山・愛宕山・妙見山など	年間
洲本小唄	37	洲本市	随時
新洲本小唄	38	洲本市	随時
浅野の獅子舞	28	北淡町浅野地区	不定期
生田五尺節	39	北淡町	随時 慶事
淡路人形浄瑠璃	36	三原町・南淡町	随時
大久保踊	10	三原町 八木寺の境内鎮守の森など	四季を通して随時 町人形まつりなど
中島踊り 小榎列踊り	11	三原町志知中島・榎列	随時
厄払い(三原町の例)	79	三原町	年間
灘の柴刈り唄(淡路柴刈り唄)	40	南淡町灘・洲本市	随時
沼島のそうれん	81	南淡町 沼島	年間
沼島の年中行事	82	南淡町 沼島	年間
豊年枡おどり	64	南淡町 賀集	随時

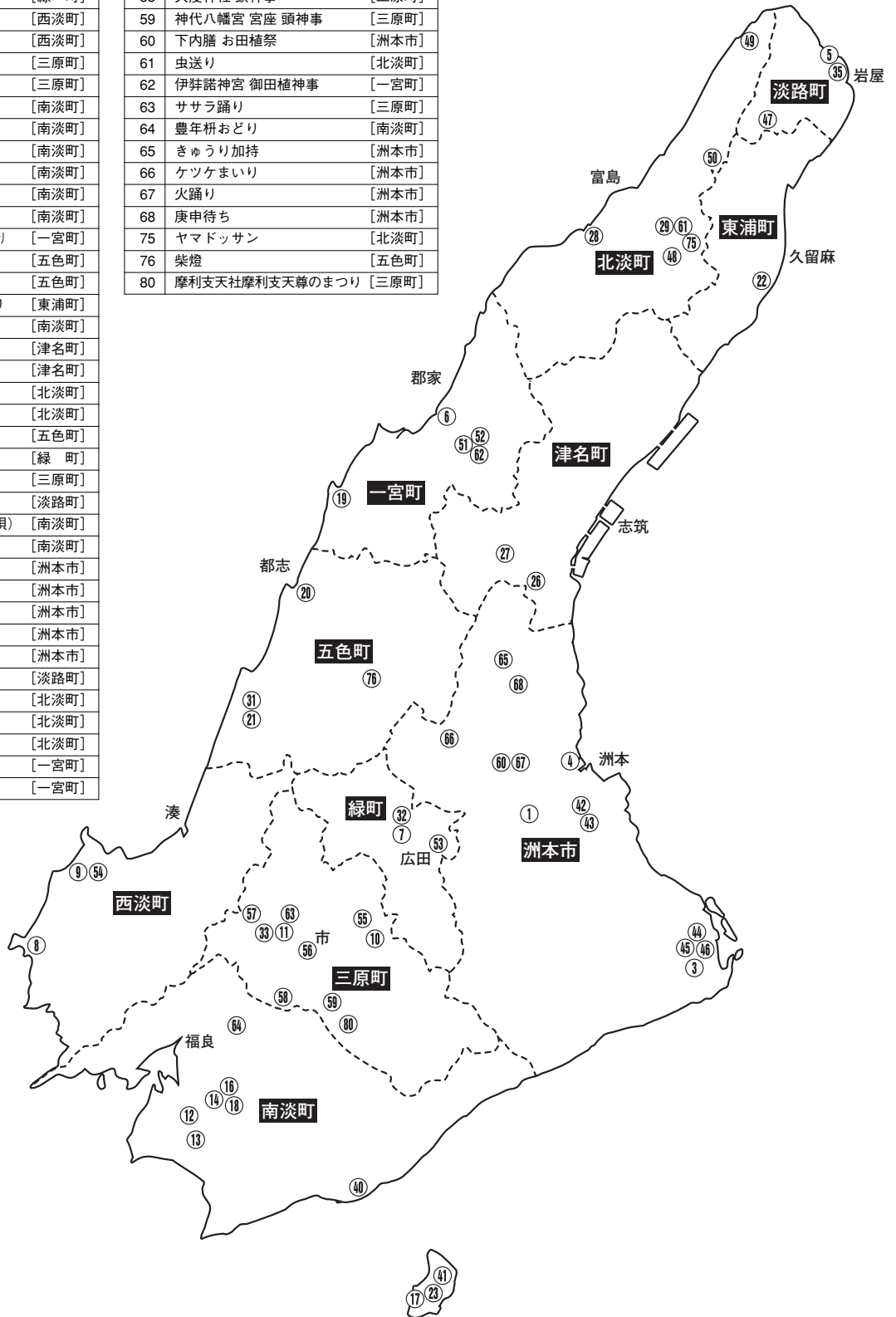
※調査時点(平成15年度)ものを記載しました。

4 — (2) 所在地図

※調査時点(平成15年度)で開催地・所在地等が概ね特定できるものを記載しました。

1	チコテン踊り	[洲本市]
3	由良盆踊り	[洲本市]
4	炬口大漁踊	[洲本市]
5	岩屋の盆踊り	[淡路町]
6	やっちょろまか音頭	[一宮町]
7	五尺踊	[緑 町]
8	扇おどり	[西淡町]
9	傘おどり	[西淡町]
10	大久保踊	[三原町]
11	中島踊り 小榎列踊り	[三原町]
12	阿万地区各集落盆踊り	[南淡町]
13	阿万 風流大踊小踊	[南淡町]
14	きつねおどり	[南淡町]
16	机くずし	[南淡町]
17	沼島の盆踊	[南淡町]
18	花笠おどり	[南淡町]
19	山田・草香両八幡神社 つかいだんじり	[一宮町]
20	長林寺 つかいだんじり	[五色町]
21	鳥飼八幡神社 舟だんじり	[五色町]
22	事代主神社の水かけまつり	[東浦町]
23	沼島八幡宮 夏祭	[南淡町]
26	下司大名行列	[津名町]
27	中田伊勢の森 梯子獅子	[津名町]
28	浅野の獅子舞	[北淡町]
29	すわり相撲	[北淡町]
31	鳥飼八幡神社 大綱引き	[五色町]
32	安住寺の蛇祭	[緑 町]
33	子ども相撲	[三原町]
35	石屋神社 エビス舞	[淡路町]
40	灘の柴刈り唄(淡路柴刈り唄)	[南淡町]
41	沼島だんじり唄 正月節	[南淡町]
42	巖島神社 粥占祭	[洲本市]
43	巖島神社 弁天祭り	[洲本市]
44	由良湊神社 五カ所祭り	[洲本市]
45	由良湊神社 ねり子祭り	[洲本市]
46	夏越し祭り(なごせ)	[洲本市]
47	開鏡山観音寺 湯立神楽	[淡路町]
48	お当	[北淡町]
49	祇園神社 湯立て祭り	[北淡町]
50	的射の神事	[北淡町]
51	伊弉諾神宮 御粥占祭	[一宮町]
52	伊弉諾神宮 例祭	[一宮町]

53	広田蛭子神社 茅の輪くぐり	[緑 町]
54	的射の儀	[西淡町]
55	上八木八幡神社 神踊り	[三原町]
56	戎神社歳の市祭(エベッサン)	[三原町]
57	伊勢明神社 頭神事	[三原町]
58	久度神社 頭神事	[三原町]
59	神代八幡宮 宮座 頭神事	[三原町]
60	下内膳 お田植祭	[洲本市]
61	虫送り	[北淡町]
62	伊弉諾神宮 御田植神事	[一宮町]
63	ササラ踊り	[三原町]
64	豊年枀おどり	[南淡町]
65	きゅうり加持	[洲本市]
66	ケツケまいり	[洲本市]
67	火踊り	[洲本市]
68	庚申待ち	[洲本市]
75	ヤマドッサン	[北淡町]
76	柴燈	[五色町]
80	摩利支天社摩利支天尊のまつり	[三原町]



4 — (3) 補足資料

洲本民踊「おまあや」歌詞	52
「傾城阿波鳴門順礼歌の段」解説と外題	53
「灘の柴刈り唄」歌詞	54
正井家平面図	55

ここでは淡路民踊の一例として「おまあや」、だんじり唄の一例として「傾城阿波鳴門順礼歌の段」、民謡の一例として「灘の柴刈り唄」、民家の一例として正井家（東浦町）の平面図を紹介します。

洲本民踊 おまあや

(「おまあや」については、P 19のNo 2本文を参照)

序 一、おまあやで覚えてか一の湯の前で、ノーコーレー

一分やろと約束じゃ ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

二、洲本お城の九郎兵衛様は ノーコーレー

お名は黒でも 面白じゃ ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

三、お城お山の芝右衛門 狸や ノーコーレー

お武家姿で渡海する ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

四、松になりたや 台場の松に ノーコーレー

出船 入船見て暮らす ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

破 五、洲本よいと朝日をうけて ノーコーレー

三熊おろしが そよそよと ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

六、みどり萌立つ三熊の若葉 ノーコーレー

染めて着せたや主の肌 ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

七、洲本大浜 松原つづき ノーコーレー

金と銀の波よせる ソリヤホンマノコトカイナア

八、古茂江住吉 いいその沖にや ノーコーレー

呼べば答える 友ヶ島 ソリヤホンマノコトカイナア

急 九、おまあや踊りはわいらの踊り ノーコーレー

猫も狸も みな踊れ ソリヤホンマノコトカイナア

十、踊り踊るなら三十までに踊れ ノーコーレー

三十すぎたら子が踊る ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

十一、盆にゃいかなか今年の盆にゃ ノーコーレー

まがる子もなしかかもなし ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

十二、おまあや娘の情けに惚れて ノーコーレー

今じゃ宿六 かか天下 ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

結 十三、おまあや百までわしや九十九まで ノーコーレー

共に白髪の 生えるまで ソリヤホンマノコトカイナア ウソウソ

※ 邪魔になると言う方言

傾城阿波鳴門 順礼歌の段 (阿波十)

阿波の国主玉木家の若殿が吉原の遊女に溺れているすきに乗じて悪臣たちがお家横領をたくらみ、家老桜井主膳の預かる主家の宝刀を奪って主膳を失脚させる。主膳の旧臣十郎兵衛と妻お弓は、主家のため刀を詮議しようとし、心ならずも盗賊の群に身を投じたのである。

ある日、偶然来合わせた順礼の子がわが子と知ったお弓は、現在の身の上を思い合せて、親子と名のつては反って将来この子に難儀がかかると思い、わざと母親と名のらずに返したが、やがてこらえかねてその後を追って行く。行きがちにおつるを連れて帰った十郎兵衛は、おつるの所持する金を奪おうとしたはずみにおつるを殺してしまった。戻って来たお弓から、それこそ故国の阿波に残した娘のおつるであると聞かされ、夫婦は悲嘆にくれる。のち十郎兵衛は、刀を手に入れ、玉木家は安泰になる。

阿波の鳴門順礼歌の段

出し 親は子故に子は子で親に強き縁が仇となる。運命悲しき稚児が親を恋しさはる 〳 〳 とたずね 〳 〳 て浪速路や順礼姿もあわ哀れ声

(詠歌) ふだらくや岸打つ波は三熊野の

おつる 順礼に御報謝

お弓 とても可愛らしい順礼衆 国はいつく してととさんやかかさんの名は

おつる アイ国は阿波の徳島 ととさんの名は十郎兵衛 かかさんの名はお弓と申します

小さい時別れたれば顔もおぼえず 早よう 尋ねて逢いたい 一人旅じやてて どここの宿でも泊めてはくれず 野にねたり山にねたり人の軒の下にねては叩かれたり よその子供衆が か

お弓

おつる

お弓

大振

おつる

お弓

振り

かさんにかみ結うてもら貰うたり 夜は抱かれてねやしやるの 見ると ととさんやかかさんはどこにどうしてござるやら会いたいこつちや 〳 〳 〳 〳 と

ワアツと 泣き出す幼児より母は涙に胸せまり

ああこれ なんぼ一人旅でもたんとせぜさえやればと泊める程に 僅かなれども志

この金を路金にして早よ国へ帰りや あい有難うございます そんならもうごんじます

これ娘 もういにやるかや

名残が惜しい別れとない 〳 〳 〳 〳 わいのを名残り

惜しげに振り返り どこをどうして尋ねたら恋しい父やかかさんに会れることやら会わせてと手を合わしたるいじらしさ

南無大悲の観音様 父母の恵みも深き粉川寺

泣く泣く別れ 行くあとを見送り 〳 〳 伸び上り

コレ娘も一度こちら向いてたも おつる 〳 〳 〳 〳

おつるいの 折角永の海山越えかんなんしんくの 愛し子と不思議と会いわ会いながら

親子再びこの世では会えぬ別れの悲しさは 余りと言うに余りあり

〔だんじり唄〕については、P.23のNo.25本文を参照

灘の柴刈り唄

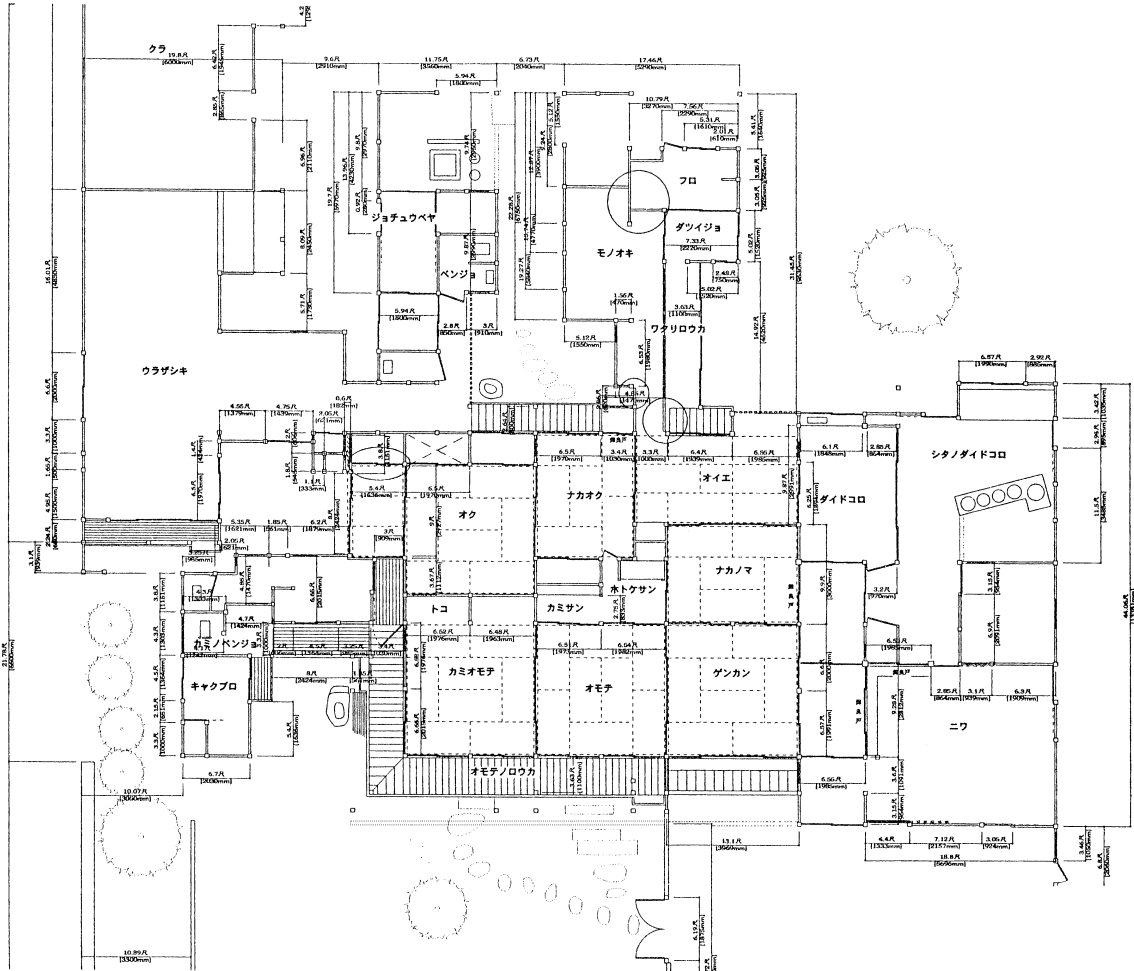
伝唱 直原 玉青
発掘 梅若 朝悠

- 一、灘の姉さん 柴刈る手振り ハイハイ
まぜの雲より 早よござる
- 二、灘の水仙 見に来やしゃんせ ハイハイ
波の音する 花ごしに
- 三、私しゃ平家の 落武者娘 ハイハイ
赤いゆもじに 赤だすき
- 四、灘の踊りは 落武者踊り ハイハイ
鎖なぎなた からませて
- 五、灘の山から 沼島を見れば ハイハイ
沼島 浮島 沖の島
- 六、わしの心と 沼島の山は ハイハイ
ほかに気(木)がない 松ばかり
- 七、わしら山行きや いばらがほれる ハイハイ
いばらとるのに 日が暮れる
- 八、わしら山行つて 柴刈り唄や ハイハイ
猿が向こうで まねをする
- 九、灘の姉さんに やりたいものは ハイハイ
鎌や 荷縄に わら草履
- 十、朝は朝星 夜早は夜星 ハイハイ
鎌を持つ手に 汗にじむ
- 十一、柴の一束 出来たで帰ろ ハイハイ
添えた椿は 様のもの
- 十二、柴の二十貫も 頭に ハイハイ
日没もらうは 十五銭
- 十三、山にいてさえ 遅けりゃ思う ハイハイ
聞けば南部へ 米買いに
- 十四、山で精出しゃ 日の暮れ忘れ ハイハイ
ヒロの鳴声 聞いて戻る

(※二、三、四、十一番は玉青作詞)

(「灘の柴刈り唄」については、P.27のNo.40本文を参照)

正井家平面図



(内容については、P42のNo.96本文を参照)

4 — (4) 参考文献・引用文献

書籍・資料名	著者・編者等	出版社・発行所等	出版・発行年
淡路国名所図絵	暁鐘成	(株) 臨川書店	明治27年
淡路島の民俗	和歌森太郎	吉川弘文館	昭和39年
西淡町風土記	菊川兼男	西淡町教育委員会	昭和41年
大久保踊	大久保踊保存会	三原町教育委員会	昭和45年
沼島物語	沼島壮年会	沼島壮年会	昭和45年
淡路町風土記	淡路町風土記編集委員会	淡路町	昭和48年
洲本市史	洲本市史編さん委員会	洲本市	昭和49年
北淡町誌	北淡町誌編集委員会	北淡町	昭和50年
淡路人形浄瑠璃	財団法人淡路人形協会	淡路人形浄瑠璃協会	昭和52年
兵庫県民俗芸能誌	喜多慶治	錦正社	昭和52年
広報すもとNo.225	洲本市役所市長公室	洲本市	昭和54年
三原郡史	三原郡史編集委員会	三原郡町村会	昭和54年
淡路巡礼	武田信一 徳田壽春	名著出版	昭和56年
だんじり唄全集	木田敏男	三原町壇尻唄保存会	昭和56年
淡路祭事記365日	神戸新聞淡路総局	神戸新聞出版センター	昭和58年
五色町史	五色町史編集委員会	五色町	昭和61年
津名町史	津名町史編集委員会	津名町	昭和63年
淡路島の社日信仰	田村正	淡路地方史研究会	平成元年
くましろのさと	神代史談会	神代公民館	平成2年
ふるさとの神々と仏たち 洲本編	田村正	淡路地方史研究会	平成4年
西淡の文化財	西淡町生涯学習課	西淡町・西淡町教育委員会	平成10年
ふるさと訪ね歩き	藤平明	南淡町教育委員会	平成10年
緑町風土記	緑町合併20周年記念誌編集委員会	緑町教育委員会	平成10年
一宮町史	一宮町史編集委員会	一宮町	平成11年
洲文協郷土芸能祭芸能解説書	洲文協郷土芸能祭実行委員会	洲本市文化団体連絡協議会	平成11年
東浦町史	東浦町史編集委員会	東浦町	平成12年
淡路島の刺し子のどんざ	シャロン・サダコ・タケダ	北淡町民俗資料館	平成13年
淡路学読本	投石文子	淡路島デザイン会議	平成14年
全国の一の宮めぐり	山本尚幸	(株) 学習研究社	平成16年

お わ り に

淡路島は、周りを海に囲まれており、その立地条件から、歴史や風土、生活の背景などが多様で、このことが伝統芸能や文化にも反映しており、内容豊かなものが多く、日本全国に発信できるものも数多くあります。今回の調査は、島内各地で保存継承されてきた、または、廃絶してしまった、特に伝統芸能を中心に生活文化も含め広く調査しました。

「淡路人形浄瑠璃」から生まれた浄瑠璃くずしも呼ばれる「だんじり唄」は、淡路島固有の伝統芸能であり、淡路巡遷弁財天「回り弁天」は、生活から生まれた神仏習合の淡路特有の祭りの形態とも言えます。

また、「ヤマドッサン」は、山岳信仰が強い、日本でも他に見られない特徴的な風俗であり、「社日ツァン」は、淡路島と四国との関わりを表す風俗と言えるでしょう。

さらに、伊弉諾神宮の例祭を代表として、島内各地でみられる「だんじり」は、淡路島の屈指の有形財産と言えます。五段の布団だんじりに見られる豪華な浮刺繍、狭間に彫られている模様は圧巻です。

その他淡路島の風土から生まれた数多くの固有の伝統芸能や文化があることを、今回の調査を通して再認識・発見することができました。

今後は、これらをどのように保存・継承あるいは復活させ、情報発信していくかが課題になります。多くの方々に、まず、関心を持っていただくことがポイントとなります。これまで、日常生活で何気なく関わってきた芸能や文化が、本当に素晴らしいものだと思いをもち、本物として淡路島から発信していきたいものです。

今回の調査は、限られた時間や手段の中での調査であったこと、また、案件の採否については、識者のご意見をいただきつつ、編者において決定させていただいたこと等から、関係の方々からご意見やご批判もあるかと存じますが、このような取り組みのスタート・基盤づくりの段階ということで、ご容赦いただきたいと思えます。

最後に、今回の調査でお世話になりました、神戸女子大学教授 田中久夫先生、淡路地方史研究会会長 武田信一先生、ならびに各市町教育委員会文化関係担当の方々に、多大なご協力を賜りましたことに衷心より感謝申し上げます。

特に、武田信一先生には、調査を開始するにあたってのジャンル分類から、データ整理にわたるまで、調査全般にわたりご教示賜りました。

今回の調査が、淡路島の活性化の一助となることを願ってやみません。

平成16年3月

県立淡路文化会館 文化専門員 投石文子
(編者)

資料・写真提供等で協力いただいた方々

神戸女子大学教授	田中 久夫氏
淡路地方史研究会会長	武田 信一氏
北淡町歴史民俗資料館館長	小川 節美氏
淡路人形浄瑠璃資料館館長	正井 良徳氏
淡路人形芝居サポートクラブ事務局長	萩原 重幸氏
南淡町文化財調査専門員	藤平 明氏
郷土史研究家	濱岡きみ子氏
淡路文化団体連絡協議会会長	武田 清市氏
南淡町文化協会会長	徳田 壽春氏
洲本市立淡路文化史料館次長	浦上 雅史氏
伊弉諾神宮権宮司	本名 孝至氏
五色町多聞寺住職	鈴木 瞭導氏

〔順不同〕

「淡路の伝統芸能と文化」

平成16年3月

発行 兵庫県淡路県民局県民生活部県民運動課
〒656-0021 兵庫県洲本市塩屋2-4-5
TEL.0799-26-2046 E-mail awajiks@pref.hyogo.jp
兵庫県立淡路文化会館
〒656-1521 兵庫県津名郡一宮町多賀600
TEL.0799-85-1391 E-mail Awajibunka@pref.hyogo.jp

印刷 淡路印刷株式会社
〒656-0121 兵庫県三原郡緑町山添168-5
TEL.0799-45-1323 E-mail awaji-p@chive.ocn.ne.jp

